日本語教育振興會藏書之印
副本

成人用

速成日本語教本學習指導書 上卷

南方諸地域用

成人用
速成

日本語教本學習指導書 上卷

文部省編纂

東京外国語大学
図書館蔵書
673637
平成 23 年度

目次

成人用速成日本語教本編纂趣意……一
成人用速成日本語教本學習指導要領　上卷……五

一課……九
二課……二十四
三課……二九
四課……三十四
五課……三七
六課……四十
七課……四十四
八課……四七
九課……五十
十課……五十五
十一課……五六
十二課……五七
十三課……五九
十四課……六十一
十五課……六十三
十六課……六十五
十七課……六十五
十八課……六十六
十九課……六十七
二十課……六十九
二十一課……七十
二十二課……七十一
二十三課……七十三
二十四課……七十四
二十五課……七十六
二十六課……七十七
二十七課……七十九

二十八課……八十
二十九課……八十二
三十課……八十五
三十一課……八十七
一……八十九
二……八十八
三……九十
四……九十二
五……九十五
六……九十七
七……九十九
八……百
九……百二
十……百四
十一……百七
十二……百九
十三……百十一
十四……百十三
十五……百十五
十六……百十七
十七……百十九
十八……百二十一
十九……百二十六
二十……百二十七
二十一……百二十九
二十二……百三十一
二十三……百三十三
二十四……百三十五
二十五……百三十八
二十六……百四十一
二十七……百四十四
二十八……百四十六
二十九……百四十九
三十……百五十四

成人用速成日本語教本編纂趣意

一　目的

成人用速成日本語教本は、主として成人に對し、短期間に簡易な日本語を習得せしめようとする目的を以て編纂したものである。

日本語の學習には、先づ口と耳とによる言葉の練習より始め漸次文字による表現に移る方法と、最初から文字に書かれたものの意味を、學習者の母語を通じて理解することから始め、口頭を以て話される言語を理解し、又自らも口頭を以て表現するに至る方法とがある。しかし、文字に書いたものを學習せしめるにしても、腦中に於て音聲化された言葉を通じて理解するのを通例とするから、日本語を眞に自己のものたらしめるためには、音聲による表現を習得することが、その前提となるべきである。しかも、本書は社會生活に必要な日常語を授けるのが目的であるから、その意味からも話し言葉の運用に習熟せしめ、併せて日本語の基本的體系に關する知識を與へようとした。

一　組織

本書は上・下の二冊に分つて編纂した。上卷に於ては、日本語の重要なる語彙及び基本的語法の習得を主とし、兼ねて片かな及び平がなの全部を習得せしめることを期した。下卷に於ては、上卷で授けた語法を應用したものを主とし、その發展として、やや複雜な形式及び社會生活上必要な特殊の言葉遣ひを授けようとしたのである。

一　教材

教材には標準語乃至標準語的表現と認められる語彙・語法を收載した。

題材は、初期のものは語學的訓練を主として身邊・事物にとつてゐるが、やや進むに從つて、日本人の日常生活の各方面に亙り、また日本を中心とする大東亞の確立、日本精神の理解に資するものを收載し、その配列に當つては、各課間の連絡を圖るに努めた。また、現地に取材したものも掲げたが、學習者の理解し得る範圍内に於て、主として日本的題材を採つた。蓋し日本語を學習することは、單に日本語を以て思想の交換をなし得るといふに止まらず、日本人の思想・感情、並びに日本語の背景をなす日本文化の體得を

目的とするからである。

なほ、本書は挿畫を特に重視し、教材の裝飾的說明と考へず、場面の瞬間的描寫として取扱つた。指導者は問答の契機をこれに求め、これを十分活用することによつて、教室作業に生彩を加へ、話し言葉運用の發展を期すべきである。

一　かな遣

かな遣は、文部省著作國語教科用圖書のものによつた。かな遣については、他の便宜的なものに據らうとする考へもあらうが、醇正な日本語を普及せしめ、大東亞全地域を通じて日本語の統一を期するためには、現在わが國で正しいかな遣と認められてゐるものに從ふべきである。但し、かな遣は活用語尾・助詞等につき注意せしむべきであり、その他は漢字のかげに隱れるのを常とするから、初期の段階に於ては、讀み得ることを標準として指導すべきである。

次に、本書に於ては分ち書きの方法をとつたが、その方法は、文部省著作國語教科用圖書に示されたものに準據し、學習上の便宜を考へて多少の變更を加へた。

一　發音符號

本書は、發音上注意すべき新出語乃至重要語につき、頭註に於て片かなの字形に基づく發音符號(指導要領參照)を用ひて發音を明記し、話し言葉の習得に資することとした。

一　教授時數

本書は各卷約百時間を以て教授することを大體の目標としてゐる。しかし、實際の教授に當つては、學習目的、學習能力等によつて、この時數に增減があつてもさしつかへない。

成人用速成日本語教本學習指導要領　上卷

一　成人用速成日本語教本は、始めて日本語を學習する成人に、日本語の初歩の手引をしようとして編纂した教科書である。しかも、短期間に日常生活に必須な挨拶言葉や、平易な思想の傳達の手段を習得させようとする教科書である。隨つて、指導の方法が適切でなくては、十分な效果を擧げることはできない。これ本指導書が、編纂趣意とともに學習指導の方法に關する要領を擧げて、實際指導の參考に供しようとする所以である。

一　われわれの日常の談話は、音聲を主とし、これに指示・身振・表情・動作等を意識的にまたは無意識的に交へて、思想感情を傳達しあふのである。文字に書いたものを讀む場合でもそれを聽覺映像にかへて理解するのを通例とする。隨つて、言語學習の初歩に於ては、この眞相に觸れた指導の方法でなくては、十分な效果を收めることはできない。本指導書はさういふ立場からの學習指導を立案した。

一　本指導書に示した指導事項は、ただその概要に過ぎない。これをそれぞれの時間

に於ける指導内容として具體化するのは、一に指導者の工夫に俟たなくてはならない。蓋し、生きた教室内に於て、千變萬化すべき作業を固定せしめることは、課業の生命を奪ふに至るからである。

指導過程としては、先づその時間に於て學習させようとする教材と關係の深い既習教材の復習を行ひ、これと關聯せしめて新教材を提示し、更にこれを既習教材に結合して應用を試みさせ、學習を深く確實にさせることが肝要である。

指導方法は、話し言葉に於ては、指導者または他の學習者の話し言葉を聽き取らせる聽方、學習者自身に話させる話方、及び指導者と學習者とで、または學習者相互で行ふ問答を基本單位とし、これを如何に組合はせるかによつて決定せられる。

書き言葉に於ては、讀方・書方・綴方等の指導が必要である。

(イ)聽方　外國語習得の出發點はその外國語の聽方にある。なるべく多く聽かせ、正しく精しく聽き取らせることが要諦である。

(ロ)話方　話すことと聽くこととは相卽した働きであつて、話すことによつて聽く耳があき、聽くことによつて話す口が開くといふのが、その眞相である。話すことは熟練に俟つところが多いから、あらゆる機會に學習者をして話さしめ、その言語活動を體得せしめることに努めなくてはならない。

(ハ)問答　日常の言語生活に於ける實際の會話は、主として聽くことと話すこととから成つてゐて、具體的・内容的・情的である。しかるに、問答は抽象的・形式的・知的であつて、問ふ者と答へる者とが對立的な立場をとり、形式的照應を以て發展するのが一般である。

さうして、問答は、語學々習の諸習性を養ふに最も有效な指導法として、ただに話し言葉を習得する場合のみならず、書き言葉習得を目的とする場合に於ても活用せられ、聽方・話方によつて得た言葉につき、その發音・意義の把握を確實にさせ、その應用を自然ならしめる上に大なる效果をもたらすものである。隨つて、これが適切に用ひられると否とは、學習指導の死活を決する鍵であるといつても過言ではない。

指導法としての問答を用ひるに當つて注意すべき諸點は、次の如くである。

(一)明確な答をなし得る問であること。

學習者の高い判斷力・記憶力・鑑賞力等の働きを要するもの、または未知の事實についての問は避けなくてはならない。

(二)容易に答へ得る問であること。

問は、學習者に未知の語彙の使用を、答の中に要求するやうなものであつてはならない。

(三)答は問の本旨に適應するものであること。

日常生活に於ける實際の會話は、內容の傳達を主とするものであるから、形式の照應はさほど重要ではない。しかし、言語訓練の手段たる問答は、形式とともに、問の重點に對して正しく卽應するものでなくてはならない。

例へば、「私(山本)はきのふ小包を出しに郵便局へいきました。」といふ本文に對する質問として

i 山本さんは小包を出しにいつ郵便局へいきましたか。

ii 山本さんはきのふ何を出しに郵便局へいきましたか。

iii 山本さんはきのふ小包を出しにどこへいきましたか。

の三問があり、これに對して、何れも本文の如く

山本さんはきのふ小包を出しに郵便局へいきました。

と答へ得るが、これでは言語訓練の手段としては不適當で、

i に對しては

きのふいきました。

と答へさせ、

ii に對しては、

小包を出しにいきました。

iii に對しては、

郵便局へいきました。

の如く答へさせ問の重點と答とが、完全に照應するやうにしなければならない。

(四)速度を重視すること。

言語訓練としての問答は、適當な速度を保つことが重要である。速度の適當でない問答は、實際の言語生活に符合せず、隨つて言語訓練としての效果を減ずるものであるから、發音の不正確を來さない限り、初期に於ても、實際の談話に近い速度を以て行はなければならない。

(五)問の難易を調節すること。

同じ内容の問でも、發問の方法によつて難易の程度に差異を生ずる。その困難の程度は、次の順序による。

(i) 肯定または否定を以て答へられる問

（例）あなたはきのふ散歩にでかけましたか。

(ii) 選擇質問

（例）あなたはきのふ散歩にでかけましたか、家に居ましたか。

(iii) 疑問詞を含む質問

（例）あなたはきのふ何をしましたか。

何故ならば、(i)は單に「はい」または「いいえ」のみを以て答へられ、長い答の場合に於ても、問の中に含まれる語彙をそのまゝ用ひれば足るからである。(ii)は如何なる場合に於ても、問の中の半分を繰返すを要する點に於て(i)よりも困難度を增し、(iii)はこれに答へるためには、ほとんど全部の用語を學習者自らの語學力によつて動員し、正しい語法に從つて答を構成しなければならないからである。

指導者は、右の區別を念頭におき、學習者の能力、程度を考慮して問の種類を適宜按排して活用するとともに、問答の展開については、出來る限り飛躍なく、互に關聯を保ちつつ進むやうに注意しなければならない。

なほ、指導法としての問答は、言語活動の形式を體得せしめるための訓練であるから、日常會話に於ては、ほとんど現はれることのない問や答が行はれることも出て來がちである。しかし、それは主として語學習得上避けられない内容的な不自然であつて、形式的な不自然ではない。この内容的な不自然は、知識や經驗の程度に比して、その言語を運用する力が甚しく低い學習者の言語訓練に當つては、或程度まで不可避なことである。隨つて、問答の内容が、出來るだけ實際の會話に近くなるやうに注意すると共に、形式の體得を主とする言語訓練の本旨を逸しないことが肝要である。

(二) 讀方　讀方は、口に出して讀む場合はもとより、默讀の場合に於ても、他人の書き綴つた文章の思想・感情を理解せしめることを本旨とする指導法である。心理的には、文字より受ける刺戟を腦中に於て音聲化し、その言葉を理解せしめることである。隨つて、話し言葉を體得してゐなければ、眞の意味に於ける讀方はできない。ここに讀方と話方との重要な關聯がある。

正しく讀むことは結局文字を通じてその文章の表はす思想・感情と一體になることであるが、そのためには、先づ正しい發音・抑揚による音感から出發して、言語の意味・語感に沒入しなくてはならない。讀方指導に先だつて話し言葉の訓練を與へる要は、ここに存する。

初步の讀方指導に當つては、音讀を必要とすることはいふまでもないが、進んだ段階に於ては默讀をも課すべきである。

(ホ)書方　書くことも亦た讀方の一操作である。即ち、文字の畫や筆順を正しく指導し、正確に書寫せしめて、文字の記憶を確實にし、進んで教材を適當に書取らせることであつて、ここに實際指導に於ける讀方と書方の相即がある。

學習者にとつて、我が國の文字、殊に漢字の學習は、相當困難なことであるから、學習者の好奇心を利用して、なるべく興味深く指導することが肝要である。また一應文字を習得して後は、單なる文字練習としてではなく、言語・文章の意義・構造の體得に資することを目標として行ふべきである。

(ヘ)綴方　綴方は話す事の文字化である。即ち、文を綴ることは心理的には、自己の話し言葉を書取ることである。隨つて、綴方は話方と密接不離の關係にある。ただ語學教育に於ては、話方の程度が或主題による一連の文を綴らせる、いはゆる作文の域に達しない時期が、相當に長期に亙つて存するから、作文練習として言語の形式的方面の訓練を與へ、自由作文の基礎たらしめることが必要である。

一　本指導書は學習指導の方法を、時間を單位として計畫せず、教材を單位として立案した。殊に第十一課以後に於ては、問答を一々擧げることをせず、重要と考へられる問のみを列擧することとした。學習の時・所・位に適當な指導教案は、指導者自ら作成すべきものであるから、その素材を提供しようとしたためである。

一　本指導書は、敍上の趣旨に基づき、各課に關して、教材・指導の二項を設け、更に備考に於て種々の注意を記すこととした。

(い)教材

教材の形式方面の研究である。

新出語　新出單語を擧げたのであるが、元來これ等は、その基準のとり方によつて、その數へ方に大きな變化を來すものであるから、本書に於ては、實際教授の便を主として適宜分類した。

語法　語法に於ても、語の場合と同じくその基準如何によつて繁簡の程度に大き

な差を生ずるものであるから、學習者の立場を考慮し、指導の中心たるべき重要語法を擧げることとした。隨つて、嚴密には同一語法に屬するものも、指導上必要と思はれるものは、再出したものもある。

新出文字　新出の文字及びその讀替を掲げ、指導の際に於ける參考に資した。

發音　教材の讀方を掲げて、左記の發音符號を以て示した。

發音符號表

アイウエオ		ガギグゲゴ	
カキクケコ		ガギグゲゴ（ガ行鼻音）	
サシスセソ		ザジズゼゾ	
タチツテト		ダ　デド	
ナニヌネノ		バビブベボ	
ハヒフヘホ		パピプペポ	
マミムメモ			
ヤ　ユ　ヨ			
ラリルレロ			
ワ			
ン			
ッ			
ウ（馬、梅等ノ如キ語頭ノ「ン」ヲ表ハス）			
キャ	キュ	キョ	ギャ　ギュ　ギョ
シャ	シュ	ショ	ジャ　ジュ　ジョ
チャ	チュ	チョ	
ニャ	ニュ	ニョ	
ヒャ	ヒュ	ヒョ	
ミャ	ミュ	ミョ	
リャ	リュ	リョ	
			ビャ　ビュ　ビョ
			ピャ　ピュ　ピョ

無聲化母音を示すには符號の左傍に△を附し、音調（アクセント）を示すには右側に縱線を附した。同一の單語について二樣の音調の慣用のあるものは、その一を表記し他を參考として備考欄に掲げた。

なほ小休止は一を以て、大休止は二を以て示した。

(ロ) 指導

指導の問題　教材取扱上の重點卽ち各教材について取扱上重要な諸點につき編纂者の意圖するところを述べたのである。

指導の方法　日本語指導の如き複雜な處置を要するものにあつては、指導の方面は多岐に亙り一定するものではない。故に、指導の方法は、指導の實際に卽して指導者自ら考案すべきものであるが、その教案作製の參考たらしめる目的を以て、これを掲げることとした。

一　本指導書の各課に記した指導案は、各教材による話し言葉の學習に必要な問答または問に限定した。實際の指導に當つては、學習者の力に應じ時に應じて、問答を加除して適切を期することが肝要である。

なほ◎印を附したものは補助的發問である。

一　成人用速成日本語教本上卷に提示した語彙は、約八百二十語である。この外本指導書中に多少の補充語があるが、これらの補充語は、教材の提示並びに練習上必要なものに限つた。隨つて、學級の大きさ、學習者の知能の程度、その他の理由によつて、學習者の學習能力に餘裕のある場合には本書に示したもの以外に、教材並びに環境に卽して適當な語彙を選んで補充し、語彙の數の增加を圖ることが肝要である。要は、本書中の教材を習得させることのみを目的とせず、この教材を契機として、言語訓練をなすことを目的とすべきである。

一　成人用速成日本語教本上卷に於て、文字は片かな、平がなの全部、及び漢字十八字を提出した。字畫、筆順等について細心の注意を以て指導し、且しばしば書取などを行ひ、讀方、書方、綴方のすべてを通じて、漢字の正しい讀方と書方に習熟せしめなければならない。

一　最後に、日本語を學習させるに當つて特に留意すべきことは、その指導態度である。われわれが言語を習得するのは、一に環境の力によるもので、父兄母姉を始め、周圍の人々の溫かい顧慮の下に、知らず識らずの間にその言語社會の一員となるのである。が、外國語を習得するのはこれと異なり、環境によるかはりに學習的努力により、指導者の指導の下に、練習に練習を重ねてやうやくその用を辨ずるに至るのである。この點に對しては、あたかも母語習得に於ける父兄母姉の如きいたはりの態度を持し、發音、抑揚の不備を始め、語彙選擇の不適切、語法の不正確等に至るまで、意味の通ずる限りこれを認め、かたことめいた話しぶりによつてその意圖を知り、日本語に對する親しみをもたせるとともに、これが使用の興味と勇氣とを喚起することに努め、日本

、語で話さうとする意欲の涵養と態度の育成に努めなくてはならない。指導者が、發音・語法の正確または用語・構文の的確を期するあまり、最初から批正を嚴に行ふ時は學習者は興味と勇氣を失ひ、日本語學習の意欲さへ失ふに至るであらう。入門に當つては、細瑕を厭はず、その大成を將來に期することが指導上肝要である。

かくの如くして、日本語學習の興味を喚起し、大膽・自由に談話しようとする傾向を養ひ、やがて學習の進むに從ひ、用語・構文・發音・語法の批正に着手し、次第に會話の上達を期さなくてはならない。この兩樣の態度のいづれを缺いても、またその適用に機宜を失つても有效な日本語の學習指導は期し難いであらう。

一　課

（教本二頁―三頁）

一　教材

新出語　カミ　ハサミ　ハコ　ユビワ　コレ　ハ　デス

新出文字　カ　ミ　ハ　サ　コ　ユ　ビ　ワ　レ　デ　ス

讀替文字　ハ〔ワ〕

語法　コレハ　○○デス。

發音　カミ　ハサミ　ハコ　ユビワ

コレワ　カミデス

コレワ　ハサミデス

コレワ　ハコデス

コレワ　ユビワデス

二　指導

指導の問題

本課に於ては、教材中に提示してある事物の名稱及び構文を確實に把握させると共に、文字についてもその正しい讀方及び書方を授けなくてはならない。殊に文字の提示は本課を以て初めとするので、學習者が文字に對して正しい認識及び態度を持つやう指導することが肝要である。

指導の方法

指導者は先づ事物を示しながら「これは　○○です。」と何遍も繰返していひ、更にその事物の名稱を繰返して學習者に聽かせ、聽方を十分にさせることによつて、事物と名稱との觀念聯合を圖る。この際、單に一個の事物を掲げて提示するときは、學習者がその意味を把握するのに困難を感ずるから、出來る限り同種

のものを數個用意して示すことが望ましい。

聽方が十分に行はれた後、指導者のいふのを聽いて學習者も一齊にいふ。いはゆる聽方・話方を行ふ。但しこの際に於ける指導者は、學習者にいはせることに餘り性急であってはならない。十分聽取ってゐない者に早くいはせると、誤った發表習慣がつき、學習者を當に不安な狀態におくから、却って話方に對する熱意と自信とを失はせる。指導者は學習者の反應に注意し、指導者が事物を示しながら、「これは——」といって一瞬時躊躇すると、學習者が思はず「かみです。」といって補足したいやうな衝動を示す時期をみていはせるやうにしなくてはならない。殊に初期の段階に於ては耳より口への習慣を養成する大切な時期であるから、話方學習に於ても、先づ指導者がいひ、その音聲が學習者の腦裡から消え去らぬ中にいはせるやうにしなくてはならない。

（最初の聽方に於ては○指導者が話し、△學習者は聽く。學習者が十分聽いた後は聽方・話方に移り、○指導者のいふのを聽いて、△學習者も一齊にいふ。この際も、指導者は共にいふことを忘れてはならない。）

○紙を高く揭げ示しながら、先づ

　これは　かみです。

と何遍も繰返していひ、更に「かみ」、「かみ」と反復していふ。

注意　種々の紙を用意し、形や色彩の異なったものなどを示して學習の單調を破り習得を確實にする。

○鋏を高く揭げ示しながら、先づ

　これは　はさみです。

と何遍も繰返していひ、更に「はさみ」、「はさみ」と反復していふ。

○箱を高く揭げ示しながら、先づ

　これは　はこです。

と何遍も繰返していひ、更に「はこ」、「はこ」と反復していふ。

○指輪を高く揭げ示しながら、先づ

　これは　ゆびわです。

と何遍も繰返していひ、更に「ゆびわ」、「ゆびわ」と反復していふ。

以上數回反復。

○次に個々の事物を指しながら、

　これは　かみです。

　これは　はさみです。

　これは　はこです。

　これは　ゆびわです。

と順次にいひ、更に事物を順次に手早く指しながら、

　かみ

　はさみ

　はこ

　ゆびわ

の如くいひ、發音を確かに聽かせると共に、事物とその名稱との觀念聯合を圖る。

以上數回反復。

○かみ（紙を高く揭げ示しながら）

△かみ（指導者も和して一齊に）

○はさみ（鋏を高く揭げ示しながら）

△はさみ（指導者も和して一齊に）

○はこ（箱を高く揭げ示しながら）

△はこ（指導者も和して一齊に）

○ゆびわ（指輪を高く揭げ示しながら）

△ゆびわ（指導者も和して一齊に）

以上數回反復。

○これは　かみです。（紙を示しながら）

△これは　かみです。（指導者も和して一齊に）

○これは　はさみです。（鋏を示しながら）

△これは　はさみです。（指導者も和して一齊に）

○これは　はこです。（箱を示しながら）

△これは　はこです。（指導者も和して一齊に）

○これは　ゆびわです。（指輪を示しながら）

△これは　ゆびわです。（指導者も和して一齊に）
以上數回反復。
○（紙を高く掲げ示しながら「これは……」といひ始め、中止する）
△これは　かみです。（學習者のみ一齊に）
○（鋏を高く掲げ示して同樣に取扱ふ）
△これは　はさみです。（學習者のみ一齊に）
○（箱を高く掲げ示して同樣に取扱ふ）
△これは　はこです。（學習者のみ一齊に）
○（指輪を高く掲げ示して同樣に取扱ふ）
△これは　ゆびわです。（學習者のみ一齊に）
以上數回反復。
同樣の練習を個人にいはせる。
斯樣に一齊に、又個々にいはせて、十分練習ができたならば、
○黒板に
カミ
と書き、カ・ミ——カミと、一音一音はっきりするやうにいふ。
△カ・ミ——カミ（一人一人に）
○黒板（カミの横）に
ハサミ
と書き、ハ・サ・ミ——ハサミと一音一音はっきりするやうにいふ。
△ハ・サ・ミ——ハサミ（一人一人に）
○黒板（ハサミの横）に
ハコ
と書き、ハ・コ——ハコと一音一音はっきりするやうにいふ。
△ハ・コ——ハコ（一人一人に）
○黒板（ハコの横）に
ユビワ
と書き、ユ・ビ・ワ——ユビワと一音一音はっきりするやうにいふ。

△ユ・ビ・ワ——ユビワ（一人一人に）
次に右の四語を順次に、又順序をかへ、遲滯なく讀めるやうに練習する。
○黒板（カミの下）に
デス
と書き、デ・ス——デスと一音一音はっきりするやうにいふ。
△デ・ス——デス（一人一人に）
○カミデス（鞭を以て指しながら）
△カミデス（一齊に、又一人一人に）
○ハサミデス（ハサミの下にデスを書き加へて）
△ハサミデス（一齊に、又一人一人に）
○ハコデス（ハコの下にデスを書き加へて）
△ハコデス（一齊に、又一人一人に）
○ユビワデス（ユビワの下にデスを書き加へて）
△ユビワデス（一齊に、又一人一人に）
右を順次に、又順序をかへて練習する。
○黒板（カミの上）に
コレハ
と書き、ハの右に＝をつけてワと記しコ・レ・ハ（ワ）——コ・レ・ハと、一音一音はっきりするやうにいふ。
△コ・レ・ハ——コ・レ・ハ（一人一人に）
○コレハ　カミデス（一語一語はっきりするやうに何遍も繰返していふ）
△コレハ　カミデス（一齊に、又一人一人に）
○黒板（ハサミの上）に
コレハ
と書き、
○コレハ　ハサミデス（一語一語はっきりするやうに何遍も繰返していふ。而してコレハのハとハサミのハとの發音の相違を十分認識せしめる）
△コレハ　ハサミデス（一齊に、又一人一人に）
○黒板（ハコの上）に
コレハ

と書き

○コレハ　ハコデス（一語一語はっきりするやうに何遍も繰返し、又ハの二樣の發音を十分認識せしめる）

△コレハ　ハコデス。（一齊に、又一人一人に）

○黑板（ユビワの上）に

コレハ

と書き

○コレハ　ユビワデス（一語一語はっきりするやうに何遍も繰返していふ）

△コレハ　ユビワデス（一齊に、又一人一人に）

次にコレハの次とデスの前に横線を引き、コレハとデスとは各文章に共通なものであることを知らしめ、各一つを殘して消し去り、名詞を四角に圍んで、これらが置換し得るものなることを知らしめる。

次に書物を開かせ、實物を示しながら問答を反復し、指導者が範讀した後讀ませる。

十分讀めるやうになってから、指導者は黑板上に文字を書き、その形狀及び筆順を示し學習者にも書かせる。この際指導者は書きながら發音し、學習者にも發音しながら書かせる。

斯樣にして全部終ったならば、新出文字を全部覺えて來ることを宿題として課し、授業を終る。

備考　ユビワはワの發音を示すための便宜的な手段に過ぎず語彙的に重要なものではない。從って以後餘り反復されないがハが、ワと發音される場合、そのワの音を示し得ればその使命を果したといってよい。

二課

（教本四頁―五頁）

一　教材

新出語　エンピツ　ソレ　ツクエ　アレ　ウチ　ヘヤ　ト　マド

新出文字　エ　ン　ピ　ツ　ソ　ク　エ　ア　ウ　チ

語法　ヘ　ヤ　ト　マ　ド

コレ（ソレ、アレ）ハ　○○デス。

發音　コレワ　エンピツデス。

ソレワ　ツクエデス。

アレワ　ウチデス。

コレワ　ヘヤデス。

ソレワ　トデス。

アレワ　マドデス。

二　指導

指導の問題

前課の發展として「これは　○○です。」の構文中、指示代名詞「あれ」、「それ」を「これ」に置換して用ひる場合を取扱ったものである。その中「これ」は話者の身近なものを、「それ」は聽者の身近なものを、「あれ」は兩者から離れたものを指示することを理解させるのが、指導の要領である。

指導の方法

○これは　かみです。（紙を揭げて）

○これは　はさみです。（鋏を揭げて）

○これは　はこです。（箱を示して）

○これは　ゆびわです。（指輪を示して）

と順序にいひ、學習者の記憶を喚起し置き

○これは　かみです。（紙を示しながら）

△これは　かみです。（指導者も和して一齊に）

○これは　はさみです。（鋏を示しながら）

△これは　はさみです。（指導者も和して一齊に）

○これは　はこです。（箱を示しながら）

△これは　はこです。（指導者も和して一齊に）

○これは　ゆびわです。（指輪を示しながら）

△これは　ゆびわです。（指導者も和して一齊に）

以上數回反復。

○（紙を高く揭げ示しながら「これは……」といひ始

め、中止する）

△これは　かみです。（學習者のみ一齊に）

○（鋏を高く揭げ示して同樣に取扱ふ）

△これは　はさみです。

○（箱を高く揭げ示して同樣に取扱ふ）

△これは　はこです。（學習者のみ一齊に）

○（指輪を高く揭げ示して同樣に取扱ふ）

△これは　ゆびわです。（學習者のみ一齊に）

同樣の練習を個人にいはせ十分復習する。

○これは　えんぴつです。（鉛筆を示して）

○これは　つくゑです。（机に手を觸れながら）

○これは　とです。（戸に手を觸れながら）

○これは　まどです。（窓に手を觸れながら）

と何遍も繰返していひ、更に「えんぴつ」「つくゑ」「と」「まど」を反復していふ。

以上數回反復。

○えんぴつ（鉛筆を高く揭げ示しながら）

△えんぴつ（指導者も和して一齊に）

○つくゑ（机に手を觸れながら）

△つくゑ（指導者も和して一齊に）

○と（戸に手を觸れながら）

△と（指導者も和して一齊に）

○まど（窓に手を觸れながら）

△まど（指導者も和して一齊に）

以上數回反復。

○これは　えんぴつです。（鉛筆を示して）

△これは　えんぴつです。（學習者一齊に）

○これは　つくゑです。（机に手を觸れて）

△これは　つくゑです。（學習者一齊に）

○これは　とです。（戸に手を觸れて）

△これは　とです。（學習者一齊に）

○これは　まどです。（窓に手を觸れて）

△これは　まどです。（學習者一齊に）

以上數回反復。

次に机より稍離れた所にたち

○（鉛筆を高く揭げ示しながら）

これは　えんぴつです。

○（机を指しながら）

それは　つくゑです。

○（窓を指しながら）

あれは　まどです。

机に手を觸れながら、窓に近い方に歩み、

○（机に手を觸れながら）

これは　つくゑです。

○（窓を指して）

それは　まどです。

○（離れた戸を指して）

あれは　とです。

同樣にして位置を換へ「これ」「それ」「あれ」の關係が理解できるやうにする。而して大體理解した時に

○これは　つくゑです。（机に手を觸れて）

△これは　つくゑです。（學習者一齊に）

机より稍離れてこれを指じながら

○それは　つくゑです。

○それは　つくゑです。（學習者一齊に）

机より可なり離れて

○あれは　つくゑです。

△あれは　つくゑです。（學習者一齊に）

斯樣にして「えんぴつ」「と」「まど」についても同樣に取扱ふ。

次に部屋全體を示しながら

これは　へやです。

あれは　うちです。

等を提示する。但し部屋、うち等は直ちに理解し得ないかも知れないから、漸次その意味を理解せしめる樣にすべきである。

斯樣にして一齊に又個々にいはせて十分練習ができたならば

○黒板に。

エンピツ

と書き、エ・ン・ピ・ツ——エ・ン・ピ・ツ——エ・ン・ピ・ツと一音一音はっきりする樣にいふ。

△エンピツ——エンピツ（一人一人に）

○黒板（エンピツの横）に

ツクエ

と書き、ツ・ク・エ——ツ・ク・エと一音一音はっきりするやうにいふ。

△ツクエ——ツクエ（一人一人に）

○黒板（ツクエの横）に

ウチ

と書き、ウ・チ——ウ・チと一音一音はっきりするやうにいふ。

次に右の三語を順次に又は順序をかへ、遲滯なく讀めるやうに練習する。

○黒板（エンピツの下）に

デス

と書き、デ・ス——デ・スと一音一音はっきりするやうにいふ。

○エンピツデス。（鞭を以て指しながら）

△エンピツデス。（一齊に、又一人一人に）

○ツクエデス。（ツクエの下にデスを書き加へて）

△ツクエデス。（一齊に、又一人一人に）

○ウチデス。（ウチの下にデスを書き加へて）

△ウチデス。（一齊に、又一人一人に）

右を順序に、又順序をかへて練習する。

○黒板（エンピツの上）に

コレハ

と書き、コレハと一音一音はっきりするやうにいふ。

○コレハ　エンピツデス。

△コレハ　エンピツデス。（一語一語はっきりさせる）

○黒板上（ツクエの上）に

ソレハ

と書き、ソ・レ・ハ——ソ・レ・ハと一音一音はっきりするやうにいふ。

○ソレハ　ツクエデス。

△ソレハ　ツクエデス。（一人一人に）

○黒板上（ウチの上）に

アレハ

と書き、ア・レ・ハ——ア・レ・ハと一音一音はっきりさせる。同樣にして

コレハ　ヘヤデス。

ソレハ　トデス。

アレハ　マドデス。

を順次取扱ふ。

次に各文章ともデスが共通することにつき注意を喚起し、デスを一つ殘して他のデスを消す。

次に書物を開かせ、實物を示しながら問答を反復し、指導者が範讀した後讀ませる。十分讀めるやうになってから、指導者は黒板上に文字を書き、形狀及び筆順を示し學習者にも書かせる。この際、指導者は書きながら發音し、學習者にも發音しながら書かせる。

斯樣にして全部を終ったならば、新出文字を全部覺えて來ることを宿題として課し、授業を終る。

備考　學習者の母語に於て「それ」「あれ」の區別のない場合には直觀に訴へて理解せしめるのが困難となり易いから力めて例題などを考案して置くべきである。

若し斯樣にしても理解し難い時には母語で少しの說明をなすことは差支ない。

三　課

（教本六頁—七頁）

一　教　材

新出語　ホン　ーカ　ハイ　サウ　カバン　ナン　コクバン

新出文字　ホ　イ　バ　ナ

讀替文字　サウ〔ソオ〕

語　法　コレハ　〇〇デスカ。
　　ハイ、サウデス。
　　コレハ　ナンデスカ。
　　〇〇デス。

發　音　コレワ　ホンデスカ＝
　　ハイ　ソオデス＝
　　ソレワ　カバンデスカ＝
　　ハイ　ソオデス＝
　　アレワ　ナンデスカ＝
　　コクバンデス＝

二　指　導

指導の問題

前二課の教材は聽いて復唱するか、答へるかであったが、この教材は問ふ構文を正式に提示してゐるので、問の構文をいはせる方向に新しく指導することが必要である。

「か」が疑問を示す助詞であることを、說明でなく、練習によって會得させることが肝要である。

指導の方法

最初に前二課の復習より始め、適宜學習者にもいはしめた後、漸次本課の內容に入る。

〇これは　かみです。（紙を揭げて）
〇これは　えんぴつです。（鉛筆を揭げて）
〇それは　つくゑです。（學習者の机を指して）
〇これは　はこです。（學習者の机上の箱を指して）
〇あれは　まどです。（窓を指して）
〇あれは　とです。（戶を指して）
〇これは　ほんです。（本を揭げて示しながら）
〇これは　かばんです。（鞄を示しながら）
〇これは　ほんですか。（本を示して）
　はい、さうです。（頷いて自答する）

〇これは　かばんですか。（鞄を示して）
　はい、さうです。（頷いて自答する）
〇あれは　まどですか。（窓を指して）
　はい、さうです。（頷いて自答する）
〇あれは　こくばんですか。（黑板を指して）
　はい、さうです。（頷いて自答する）
〇これは　へやですか。（部屋をさして）
　「はい、——」といひながら一瞬躊躇して學習者を見廻し、いはせようといふ風を示す。
△はい、さうです。（一齊に）
〇これは　えんぴつですか。（鉛筆を示して）
△はい、さうです。（一齊に）
〇これは　ほんですか。（本を示して）
△はい、さうです。（一齊に）
〇それは　つくゑですか。（机を指して）
△はい、さうです。（一齊に）
〇それは　かばんですか。（鞄を指して）
△はい、さうです。（一齊に）
〇あれは　とですか。（戶を指して）
△はい、さうです。（一齊に）
〇あれは　とくばんですか。（黑板を指して）
△はい、さうです。（一齊に）
　以上數回反復。
〇これは　なんですか。（本を指して）
　ほんです。（自答する）
〇それは　なんですか。（机を指して）
　つくゑです。（自答する）
〇あれは　なんですか。（黑板を指して）
　こくばんです。（自答する）
〇これは　なんですか。（紙を示して、學習者を指し）
△かみです。（一齊に、又一人一人に）
〇これは　なんですか。（鉛筆を示して）
△えんぴつです。（一齊に、又一人一人に）
〇これは　なんですか。（本を示して）

△ほんです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　なんですか。（机を指して）
△つくゑです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　なんですか。（鞄を指して）
△かばんです。（一齊に、又一人一人に）
○あれは　なんですか。（窓を指して）
△まどです。（一齊に、又一人一人に）
○あれは　なんですか。（黒板を指して）
△とくばんです。（一齊に、又一人一人に）
以上數回反復。
○これは　ほんですか。（木を示して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　かばんですか。（鞄をさして）
△はい　さうです。（一齊に、又一人一人に）
○あれは　なんですか。（黒板を指して）
△とくばんです。（一齊に、又一人一人に）
右のやうな問答を十分に行ひ、構文を完全に會得させる。
○黒板に
　コレハ　ホンデス
と書き、ホ・ン——ホ・ンと何遍も繰返していふ。
△ホ・ン——ホン（一齊に、また一人一人に）
○コレハ　ホンデス。（黒板の文字を一つ一つ指しながらいふ）
△コレハ　ホンデス。（一齊に）
○これは　なんですか。（箱を掲げて）
△はこです。（一人一人に）
○これは　はこですか。（箱を掲げたまま）
△はい、さうです。
○これは　かみですか。（紙を掲げて）
△はい、さうです。（一人一人に）
○これは　ほんですか。（木を示して）
　はい、さうです。（一人一人に）
○黒板（コレハ　ホンデスの下）に

カ
を書添へ、次行に
　ハイ、サウデス。
と書加へて一つ一つはっきりいふ。
○黒板に
　ソレハ　カバンデス。
と書き、カ・バ・ン——カバンと何遍も繰返していふ。
△カ・バ・ン——カバン（一齊に、又一人一人に）
○ソレハ　カバンデス。（黒板の文字を一つ一つ指しながらいふ）
△ソレハ　カバンデス。（一齊に）
○黒板（ソレハ　カバンデスの下）に
　カ
を書添へ、次行に
　ハイ、サウデス。
と書き加へて一つ一つはっきりいふ。
○これは　ほんですか。（木を指して）
△はい、さうです。（一齊に）
○それは　かばんですか。（鞄を指して）
△はい、さうです。（一齊に）
○あれは　なんですか。（黒板を指して）
△とくばんです。（一齊に）
○黒板（一行あけて左）に
　コクバンデス。
と書き一音一音はっきりと何遍も繰返していひ、やがて、その右に
　アレハ　ナンデスカ。
と書き、アレハ　ナンデスカ。コクバンデス。と自問自答式にいふ。
木を開かせて一人一人に讀ませ
木から離れて
○これは　なんですか。（木を指して）
△ほんです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　なんですか。（鞄を指して）

△かばんです。（一齊に、又一人一人に）
○あれは　なんですか。（黑板を指して）
△こくばんです。（一齊に、又一人一人に）

その他既習語彙を用ひて練習を行ふ。

指導者は黑板上に新出文字の形狀及び筆順を示し、學習者にも書かせる。この際指導者は書きながら發音し、學習者にも發音しながら書かせることは前課と同樣である。

新出語彙及び新出文字を宿題として授業を終る。

四　課

（教本八頁―九頁）

一　教　材

新出語　ハガキ　ーモ　イイエ　ーデハ　アリマセン
　　ソレデハ　フウトウ
新出文字　キ　モ　リ　セ　フ

讀替文字　トウ（トオ）
語　法　コレモ　○○デスカ。
　　イイエ　サウデハ　アリマセン。
發　音　コレワ　ナンデスカ＝
　　ハガキデス＝
　　コレモ　ハガキデスカ＝
　　イイエ　ソオデワアリマセン＝
　　ソレデワ　コレワ　ナンデスカ＝
　　フウトオデス＝

二　指　導

指導の問題

否定型の答及び「○○も」の「も」の用法に習熟せしめるのが要領である。

本課には肯定、否定の答と、それに對應する質問の形及び一般疑問型の問答が出てゐるので、これが練習を十分に與へることが望ましい。

指導の方法

前課までの復習をしながら新教材の提示に移ること前課と同樣である。

○これは　ほんですか。（本を高く揭げ示して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○これは　えんぴつですか。（鉛筆を示して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　つくゑですか。（机を指して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　かばんですか。（鞄をさして）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○あれは　まどですか。（窓を指して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○あれは　こくばんですか。（黑板を指して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○これは　なんですか。（本を示して）
△ほんです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　なんですか。（鞄を指して）
△かばんです。（一齊に、又一人一人に）
○あれは　なんですか。（黑板を指して）
△こくばんです。（一齊に、又一人一人に）
○これは　はがきです。（葉書を高く揭げて）
○これも　はがきです。（他の葉書を揭げて）
○これも　はがきです。（他の葉書を示して）
○これは　ふうとうです。（封筒を高く揭げて）
○これも　ふうとうです。（更に一枚の封筒を示して）
○これも　ふうとうです。（更に一枚の封筒を示して）
○これは　なんですか。（葉書を示して）
○はがきです。（自答する）
○これも　はがきですか。（他の葉書を示して）
○はい、さうです。（自答する）
○これも　はがきですか。（他の葉書を示して）
○はい、さうです。（自答する）

○これも　はがきですか。（封筒を示して）
○いいえ、さうでは　ありません。（首を左右に振りながら自答する）
○それでは、これは　なんですか。
○ふうとうです。（自答する）
○これは　なんですか。（本を示して）
△ほんです。（一齊に、又一人一人に）
○これも　ほんですか。（他の本を示して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○これも　ほんですか。（葉書を示して）
△いいえ、さうでは　ありません。（指導者も和して一齊に、又一人一人に）
○それでは、これは　なんですか。
△はがきです。（一齊に、又一人一人に）
○これも　はがきですか。（封筒を示して）
△いいえ、さうでは　ありません。（一齊に、又一人一人に）

○それでは　これは　なんですか。
△ふうとうです。（一齊に、又一人一人に）
以上の要領で數回反復。
○黒板に
コレハ　ナンデスカ。
ハガキデス。
と書き、一語一語はっきりいふ。
△コレハ　ナンデスカ。
ハガキデス。（一齊に）
○黒板（コレハと同じ高さ）に
コレモ　ハガキデスカ。
イイエ、サウデハ　アリマセン。
と書き、一語一語はっきりいふ。
△コレモ　ハガキデスカ。
イイエ、サウデハ　アリマセン。（一齊に）
○黒板（コレハと同じ高さ）に
コレハ　ナンデスカ。
と書き、その上にソレデハと書添へ、次行に
フウトウデス。
と書き、フウトウの最後のウには＝オを横に記し又は括弧の中に〔フウトオ〕と發音符號で記し、一語一語はっきりいふ。
△ソレデハ　コレハ　ナンデスカ。
フウトウデス。（一齊に）
本を開かせて一齊に、又個々に讀ませる。
新出文字の書き方を示す。
○これは　なんですか。（葉書を示して）
△はがきです。（一人一人に）
○これも　はがきですか。（他の葉書を示して）
△はい、さうです。（一人一人に）
○これも　はがきですか。（封筒を示して）
△いいえ、さうでは　ありません。（一人一人に）
○それでは　これは　なんですか。
△ふうとうです。（一人一人に）

宿題を與へ授業を終る。

五　課

（教本十頁―十一頁）

一　教材

新出語　ナイフ　ケシゴム
新出文字　ケ　シ　ゴ　ム
語法　コレハ　○○デスカ、○○デスカ。
發音　コレワ　ナイフデスカ―ハサミデスカ＝
ナイフデス＝
ソレモ　ナイフデスカ＝
イイエ―ソオデワ　アリマセン＝
ソレデワ　ソレワ　ナンデスカ＝
ケシゴムデス＝

二　指導

指導の問題

「これは○○ですか、××ですか。」といふ選擇質問の型を與へるのが本課の主眼である。

指導の方法

前課の復習より始め、漸次新教材の提示に移ること前課と同樣である。

○これは　ほんですか。（本を示して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○これも　ほんですか。（葉書を示して）
△いいえ、さうでは　ありません。（一齊に、又一人一人に）
○それでは　これは　なんですか。
△はがきです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　つくゑですか。（机を指して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○あれも　つくゑですか。（戸を指して）
△いいえ、さうでは　ありません。（一齊に、又一人一人に）
○それでは　あれは　なんですか。
△とです。（一齊に、又一人一人に）
○これは　えんぴつですか。（鉛筆を示して）
△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）
○これも　えんぴつですか。（封筒を示して）
△いいえ、さうでは　ありません。（一齊に、又一人一人に）
○それでは　これは　なんですか。
△ふうとうです。（一齊に、又一人一人に）
○これは　ナイフです。（ナイフを示して）
○これは　ナイフですか、はさみですか。
○ナイフです。（自答する）
○これは　はがきですか、ふうとうですか。（はがきを示して）

はがきです。（自答する）
○これは　けしごむです。（けしごむを示して）
○これは　けしごむですか、えんぴつですか。
○けしごむです。（自答する）
○これは　ナイフですか、はさみですか。（ナイフを掲げて）
△ナイフです。（一齊に、又一人一人に）
○それは　はがきですか、ふうとうですか。（封筒を指して）
△ふうとうです。（一齊に、又一人一人に）
○それも　ふうとうですか。（消しごむを指して）
△いいえ、さうでは　ありません。（一齊に、又一人一人に）
○それでは　それは　なんですか。
△けしごむです。（一齊に、又一人一人に）

其の他

○黑板に

コレハ　ナイフデスカ、ハサミデスカ。
ナイフデス。
と書き、一語一語はっきりいふ。
△コレハ　ナイフデスカ、ハサミデスカ。
ナイフデス。（一齊に）
○黑板（コレハと同じ高さ）に
ソレモ　ナイフデスカ。
イイエ、サウデハ　アリマセン。
と書き、一語一語はっきりいふ。
△ソレモ　ナイフデスカ。
イイエ、サウデハ　アリマセン。（一齊に）
○黑板（ソレモと同じ高さ）に
ソレハ　ナンデスカ。
と書き、その上にソレデハと書添へ、次行に、
ケシゴムデス。
と書き、一語一語はっきりいふ。
△ソレデハ　ソレハ　ナンデスカ。

ケシゴムデス。（一齊に）

本を開かせて一齊に、又個々に讀ませる。

新出文字の書方を示し練習させる。

○これは　ナイフですか、はさみですか。

（ナイフを示して）

△ナイフです。（一人一人に）

○それも　ナイフですか。（消しごむを指して）

△いいえ、さうでは　ありません。（一人一人に）

○それでは　それは　なんですか。

△けしごむです。（一人一人に）

宿題其の他の注意事項を與へて授業を終る。

六　課

（教本十二頁—十三頁）

一　教　材

新出語　アナタ　セイト　ワタクシ　センセイ

新出文字　ドナタ　タムラ　ヒロタ　ーサン

語　法　タ　ラ　ヒ　ロ

アナタ（ワタクシ）ハ　○○デス。（デハアリマセン）

アナタハ　ドナタデスカ。

ワタクシハ　△△デス。

發　音　アナタワ　セエトデス＝

アナタモ　セエトデス＝

ワタクシワ　セエトデワ　アリマセン＝

センセエデス＝

アナタワ　ドナタデスカ＝

ワタクシワ　タムラデス＝

ヒロタサンワ　ドナタデスカ＝

ワタクシデス＝

二　指　導

指導の問題

問答の土臺である問ふ者と答へる者との關係をはっきりさせるために、「わたくし」と「あなた」との對立關係を意識させるのが要領である。「わたくし」「あなた」の關係がはっきりした上で、自己及び對手の氏名を訊ねる方法に移る。

指導の方法

前課の復習より始め、新教材の提示に移ること前課と同樣である。本課以後はその事を明記しないが、その取扱の要領は同じである。

○これは　ナイフですか。（ナイフを示して）

△はい、さうです。（一齊に、又一人一人に）

○これも　ナイフですか。（消しごむを示して）

△いいえ、さうでは　ありません。（一齊に、又一人一人に）

○それでは　これは　なんですか。

△けしごむです。（一齊に、又一人一人に）

○これは　ナイフですか、けしごむですか。

（ナイフを示して）

△ナイフです。（一齊に、又一人一人に）

○これも　ナイフですか。（鋏を示して）

△いいえ、さうでは　ありません。（一齊に、又一人一人に）

○それでは　これは　なんですか。

△はさみです。（一齊に、又一人一人に）

○あなたは　せいとです。（學習者の一人に向って）

○あなたも　せいとです。（他の學習者に向って）

○あなたも　せいとです。（他の學習者に向って）

○わたくしは　せいとでは　ありません。（自分を指して）

○わたくしは　せんせいです。（自分を指して）

○あなたは　せいとですか。（學習者の一人に向って）

△はい、さうです。（指導者も和して）

○あなたも　せいとですか。（他の學習者に向って）

△はい、さうです。（指導者も和して）
○あなたも　せいとですか。（他の學習者に向って）
△はい、さうです。（學習者一人で）
○わたくしは　せんせいですか。（自分を指して）
△はい、さうです。（一齊に）
○わたくしは　せいとですか。（自分を指して）
△いいえ、さうでは　ありません。（一齊に）
○わたくしは　せんせいですか、せいとですか。
（自分を指して）
△せんせいです。（一齊に）
○あなたは　せんせいですか、せいとですか。
（學習者の一人を指して）
△せいとです。（一人で）
○あなたは　せんせいですか、せいとですか。
（他の學習者に向って）
△せいとです。
○わたくしは　○○です。（自分の姓をいふ）
○あなたは　（たむら）さんです。（學習者の姓をいふ）
○あなたは　（きむら）さんですか。（學習者の姓を呼んで）
△はい、さうです。（その學習者が答へる）
○あなたは　（たむら）さんですか。（他の學習者の姓を用ひて）
△いいえ、さうでは　ありません。
○それでは　あなたは　どなたですか。
△わたくしは　（きむら）です。
○（たむら）さんは　どなたですか。（たむらの方を向かないで）
△わたくしです。
○わたくしは　○○ですか。（自分を指して）
△はい、さうです。（一齊に）
○あなたは　□さんですか。（學習者の一人一人に）
△はい、さうです。（一人一人に）
○あなたは　××さんですか。（學習者の一人に對して他の姓をいふ）
△いいえ、さうでは　ありません。（一人一人に）
○あなたは　どなたですか。（學習者の一人一人に）
△わたくしは　△△です。（一人一人に）
○あなたは　せいとですか。（學習者の一人に）
△はい、さうです。（一人一人に）
○□さんも　せいとですか。（一人一人に）
△はい、さうです。
○わたくしも　せいとですか。（自分を指して）
△いいえ、さうでは　ありません。（一人一人に）

其の他

黒板に

アナタハ　セイトデス。
アナタモ　セイトデス。
ワタクシハ　セイトデハ　アリマセン。
センセイデス。

と書き、一語一語はっきりと何遍も繰返していふ。

△はい、さうです。
○あなたも　せいとですか。（他の學習者に）
△はい、さうです。
○わたくしも　せいとですか。（他の學習者に）
△いいえ、さうでは　ありません。
○あなたは　せんせいですか。（他の學習者に）
△いいえ、さうでは　ありません。
○あなたは　○○さんですか。（學習者の一人に）
△はい、さうです。
○あなたは　どなたですか。（一人一人に）
△わたくしは　△△です。
○□さんは　どなたですか。
△わたくしです。

其の他

宿題其の他の注意を與へて授業を終る。

七課

（教本十四頁—十五頁）

一　教材

新出語　スズキ、アノカタ　ナカジマ　ヤマグチ　ノ　オー　トモダチ

新出文字　ズ　ノ　ジ　グ　オ　ダ

語法　アナタノ（アノカタノ）　オトモダチデスカ、ワタクシノ　トモダチデス。

發音　アナタワ　スズキサンデスカ＝
ハイ、ソオデス＝
アノカタワ　ナカジマサンデスカ＝
イイエ　ソオデワ　アリマセン＝
アノカタワ　ドナタデスカ＝
ヤマダチサンデス＝
アナタノ　オトモダチデスカ＝

ハイ　ソオデス＝ワタクシノ　トモダチデス＝

二　指導

指導の問題

前課に引續いて人稱代名詞の他稱を示すと共に、所有の「の」及び敬語「お」の使ひ方を提示するのが本課の主眼である。又一旦「はい、さうです。」と答へ、更に之を敷衍して說明する方法も新しい學習內容である。

指導の方法

○あなたは　せいとですか。（一人一人に）
△はい、さうです。（一人一人に）
○わたくしも　せいとですか。（自分を指して）
△いいえ、さうでは　ありません。
○あなたは　○○さんですか。
△はい、さうです。
○あなたは　××さんですか。
△いいえ、さうでは　ありません。
○あなたは　どなたですか。
△□です。
○あのかたは　○○さんです。（學習者の一人に向ひ、他の少し離れた所にゐる學習者を指して）
○あのかたは　××さんです。（同樣にして）
○あのかたは　□さんですか。（學習者の一人に）
△はい、さうです。
○あのかたは　××さんですか。
△はい、さうです。
○あのかたは　どなたですか。
△□さんです。
○あなたは　わたくしの　せいとです。（學習者の一人を指して）
○あなたも　わたくしの　せいとです。（他の學習者の一人を指して）

○あなたも　わたくしの　せいとです。（他の學習者を指して）
○わたくしは　あなたの　せんせいです。
（學習者の一人一人に）
○□さんは　あなたの　おともだちです。
（學習者の親しい友人をさして）
○××さんも　あなたの　おともだちです。
○△△さんも　あなたの　おともだちです。
○○○さんは　わたくしの　ともだちです。
（指導者の同僚又は友人の名を擧げて）
○わたくしは　あなたの　せんせいですか。
（學習者の一人に）
△はい、さうです。わたくしの　せんせいです。（一人一人に。指導者も和して）
○あなたは　わたくしの　せいとですか。（一人一人に）
△はい、さうです。あなたの　せいとです。（一人一人に。指導者も和して）
○あなたの　おともだちですか。
（學習者の一人一人に）
△はい、さうです。あなたの　おともだちです。
○△△さんは　あなたの　おともだちですか。
（學習者の一人に）
△はい、さうです。わたくしの　ともだちです。（指導者も和して）
○××さんは　□さんの　おともだちですか。
△はい、さうです。□さんの　おともだちです。
（指導者も和して）
○○○さんは　わたくしの　ともだちですか。
（指導者の友人の名を擧げて）
△はい、さうです。あなたの　おともだちです。（指導者も和して）
○○○さんは　あなたの　おともだちですか。
△いいえ、さうでは　ありません。

○どなたの　おともだちですか。
△あなたの　おともだちです。
・其の他
黒板に、本課に示された教材を適當に分割して書き、之を一語一語はっきりと何遍も繰返して讀み、更に學習者にも一齊に又個々に讀ませ、次に本を開いて本文を讀ませ新出文字の指導を行ふと前課の如くする。
○あなたは　□さんですか。（學習者の一人に）
△はい、さうです。
○あのかたは　○○さんですか。（他の名前の學習者をさして）
△いいえ、さうでは　ありません。
○あのかたは　どなたですか。
△××さんです。
○あなたの　おともだちですか。
△はい、さうです。わたくしの　ともだちです。
○○○さんは　わたくしの　ともだちですか。
△はい、さうです。あなたの　おともだちです。
備考　本課あたりから組織的發音練習を始めてもよいが、なるべく既出の音を適當に排列して練習するのがよい。

八課

（教本十六頁—十七頁）

一　教材

新出語　ベン　マンネンヒツ　ヤマザキ
新出文字　ベ　ネ　ザ
語法　ワタクシノデハ　アリマセン。
○○サンノデス。
發音　コレワ　ワタクシノ　ペンデス＝
ソレワ　アナタノ　エンピツデスカ＝
ハイ　ソオデス＝
アレモ　アナタノ　マンネンヒツデスカ＝

イイエ　ワタクシノデワ　アリマセン。
ドナタノデスカ。
ヤマザキサンノデス。

二　指　導

指導の問題

前課に引續き所有の「の」の練習をすると共に、名詞を代表して「のもの」の意味を示す「の」の用法を習得せしめるのが主眼である。

指導の方法

○あなたは□さんですか。（一人一人に）
△はい、さうです。
○あなたは　わたくしの　せいとですか。（一人一人に）
△はい、さうです。あなたの　せいとです。
○あのかたは　△△さんですか。（他の學習者を指して）
△いいえ、さうでは　ありません。
○あのかたは　どなたですか。
△××さんです。
○あなたの　おともだちですか。
△はい、さうです。わたくしの　ともだちです。
○これは　ペンです。（自分のペンを示して）
○これは　わたくしの　ペンです。
○それは　あなたの　えんぴつですか。（學習者の鉛筆を指して）
△はい、さうです。
○あれも　あなたの　えんぴつですか。（他の學習者の鉛筆をさして）
△いいえ、さうでは　ありません。
○あれは　どなたの　えんぴつですか。
△□さんの　えんぴつです。
○これは　まんねんひつです。（自分の萬年筆を示して）

○これは　わたくしの　まんねんひつです。
○これは　わたくしの　まんねんひつですか。
△はい、さうです。
○これは　あなたの　まんねんひつですか。（一人一人に）
△いいえ、さうでは　ありません。
○それは　あなたの　ペンですか。（學習者のペンをさして）
△はい、さうです。
○あれも　あなたの　ペンですか。（他の學習者のペンをさして）
△いいえ、さうでは　ありません。
○どなたの　ペンですか。
△□さんの　ペンです。
○さうです。□さんのです。
○これは　わたくしの　ほんです。
○これは　わたくしのです。
○それは　あなたの　ほんです。
○それは　あなたのです。
○あれは　□さんのです。
○これは　わたくしのですか。（自分の萬年筆を示して）
△はい、さうです。
○これは　あなたのですか。（自分の萬年筆を示して）
△いいえ、さうではありません。
○どなたのですか。
△あなたのです。（又はせんせいのです）
○あれも　わたくしの　ペンですか。
△いいえ、さうでは　ありません。
○どなたのですか。
△××さんのです。

其の他

黑板に、本課に示された教材を適當に分割して書き、

これを一語一語はっきりと何遍も繰返して讀み、次で學習者にも、一齊に、又個々に讀ませ、更に本を開いて本文を讀ませ、新出文字の指導を行ふことと前課の如くする。

○これは　わたくしの　ペンです。
○それは　わたくしのでは　ありません。（學習者のペンを指して）
○それは　どなたのですか。（ペンの所有者たる學習者に向って）
△わたくしのです。
○あれも　あなたの　ペンですか。（他の學習者のペンを指して）
△いいえ、さうでは　ありません。
○どなたのですか。
△□さんのです。
○これは　なんですか。（萬年筆を示して）
△まんねんひつです。
○これは　わたくしのですか。
△はい、さうです。あなたのです。
○あれも　わたくしのですか。（學習者のものを指して）
△いいえ、さうでは　ありません。
○あれは　どなたのですか。
△××さんのです。

九課

（教本十八頁—十九頁）

一　教材

新出語　コノ　クツ　クボタ　ソノ　ウハギ　アノ　バウシ
新出文字　ギ
讀替文字　バウ（ボオ）
語法　コノ（ソノ、アノ）○○ハ　アナタノデスカ。

發音　コノ　クツワ　アナタノデスカ。
イイエ、ソオデワ　アリマセン。
ドナタノデスカ。
クボタサンノデス。
ソノ　ウワギワ　ドナタノデスカ。
ワタクシノデス。
アノ　ボオシモ　アナタノデスカ。
イイエ、ソオデワ　アリマセン。

二　指導

指導の問題

既に學習した「これ」「それ」「あれ」に對應する「この」「その」「あの」を提示し、同時にこれまで提示された構文の締めくくりをつけ、次課より提示される新構文に入る準備をするのが要領である。

指導の方法

○これは　あなたの　ペンですか。（自分のペンを示して）
△いいえ、わたくしのでは　ありません。
○それは　どなたの　えんぴつですか。（學習者の鉛筆を指して）
△わたくしのです。
○あれも　あなたのですか。
△いいえ、わたくしのでは　ありません。
○どなたのですか。
△○○さんのです。
○それは　どなたの　まんねんひつですか。（他の學習者の萬年筆を指して）
△□さんのです。
○それも□さんのですか。（他の學習者のを指して）
△いいえ、さうでは　ありません。
○どなたのですか。

△××さんのです。
○これは　くつです。（實物又は掛圖を示して）
○この　くつは　わたくしのです。
○この　えんぴつは　どなたのですか。（自分の鉛筆を示して）
△せんせいのです。
○この　つくゑは　どなたのですか。
△せんせいのです。
○それは　うはぎです。
○あれは　ぼうしです。
○その　うはぎは　あなたのですか。
△はい、さうです。
○あの　ぼうしも　あなたのですか。
△いいえ、さうでは　ありません。
○どなたのですか。
△××さんのです。
○この　くつも　××さんのですか。（自分の靴を示して）
△いいえ、さうでは　ありません。
○どなたのですか。
△せんせいのです。

其の他

○黒板に本課に示された教材を適當に分割して書き、之を一語一語はっきりと何遍も繰返して讀み、次で學習者にも一齊に、又個々に讀ませ、更に本を開いて本文を讀ませ、新出文字の指導を行ふと前課の如くする。尙ウハギ、バウシの發音の違ひに注意し、ウハギのハは既出の如く〔ワ〕と發音することを指示し又ギは鼻音〔ギ〕であることを指摘する。バウシではバウが合して〔ボオ〕となることにつき特に注意させる。
○これは　わたくしの　ペンですか。（自分のペンを示し）
△はい、さうです。
○その　ペンは　どなたのですか。（學習者のペンを指して）
△わたくしのです。
○あの　ペンも　あなたのですか。
△いいえ、さうでは　ありません。
○あの　ペンは　どなたのですか。
△××さんのです。
○その　うはぎは　どなたのですか。
△○○さんのです。
○あの　ぼうしも　○○さんのですか。
△いいえ、さうでは　ありません。
○どなたのですか。
△××さんのです。
○この　くつは　どなたのですか。
△せんせいのです。
○あの　まんねんひつは　あなたのですか。
△いいえ、さうでは　ありません。
○どなたの　まんねんひつですか。

△□さんのです。

十課

（教本二十頁―二十一頁）

一　教材

新出語　ココ　ーニ　ーガ　アリマス　ソコ　イス　アソコ　ナニ　カベ　ドコ

新出文字　ニ　ガ　ベ

語法　ココニ（ソコニ、アソコニ）○○ガ　アリマス。
○○ハ　ドコニ　アリマスカ。
ココニ（ソコニ、アソコニ）アリマス。

發音　ココニ　ツクエガ　アリマス＝
ソコニ　イスガ　アリマス＝
アソコニ　ナニガ　アリマスカ＝
マドガ　アリマス＝

アレワ　ナンデスカ。
カベデス。
トワ　ドコニ　アリマスカ。
アソコニ　アリマス。

二　指　導

指導の問題

本課に於ては「とこ（そこ、あそこ）に　○○が　あります。」といふ平敍と、「とこ（そこ、あそこ）に　なにが　ありますか。」といふ疑問の構文を學習させるのが主眼である。尙本課に於て助詞「が」が新出する。しかし「は」と比較してその相違を認識させるのは後に讓り、本課ではこの構文の一要素として取扱ふだけでよい。

指導の方法

○ここに　つくゑが　あります。（机を指して）
○そこに　いすが　あります。（椅子を指して）
○そこに　ぼうしも　あります。（帽子を指して）
○あそこに　まどが　あります。（窓を指して）
○これは　なんですか。（机を指して）
△つくゑです。
○つくゑは　どこに　ありますか。（自問する）
○ここに　あります。（自答する）
○ここに　なにが　ありますか。（自問する）
○つくゑが　あります。（自答する）
○そこに　なにが　ありますか。
△ぼうしが　あります。
○いすも　ありますか。
△はい、あります。
○ぼうしは　どこに　ありますか。
△ここに　あります。
○あそこに　まどが　ありますか。
△はい、あります。

○あそこに　なにが　ありますか。
△まどが　あります。
○これは　かべです。（壁に手を觸れて）
○かべは　ここに　ありますか。
△はい、あります。
○かべは　どこに　ありますか。
△そこに　あります。
○これは　なんですか。（椅子に觸れて）
△いすです。
○いすは　どこに　ありますか。
△そこに　あります。
○この　いすは　どなたのですか。
△せんせいのです。
○あれは　なんですか。（戸を指して）
△とです。
○とは　どこに　ありますか。
△あそこに　あります。

其の他

○黑板に本課に示された教材を適當に分割して書き、これを一語一語はっきりと何遍も繰返して讀み、次で學習者にも一齊に又個々に讀ませ、更に本を開いて本文を讀ませ、新出文字の指導を行ふこと前課の如くする。

○これは　なんですか。
△つくゑです。
○つくゑは　どこに　ありますか。
△そこに　あります。
○いすは　どこに　ありますか。
△そこに　あります。
○あれは　何ですか。（壁を指して）
△かべです。
○かべは　どこに　ありますか。
△あそこに　あります。
○まどは　どこに　ありますか。

△あそこに　あります。
○そこに　なにが　ありますか。（椅子を指して）
△いすが　あります。
○ここに　なにが　ありますか。
△つくゑが　あります。

十一課

（教本二十二頁―二十三頁）

一　教　材

新出語　ゴランナサイ　カネコ　ウヘ　ナカ　ハクボク
新出文字　ボ
讀替文字　ヘ〔エ〕
語　法　ゴランナサイ。
○○ノ　ウヘニ（シタニ、ナカニ）ナニガ　アリマスカ。

○○ガ　アリマス。

發　音　ゴランナサイ＝ココニ　ツクエガ　アリマス＝
コノ　ツクエワ　ドナタノデスカ＝
カネコサンノデス＝
ツクエノ　ウエニ　ナニガ　アリマスカ＝
ハコガ　マス＝
ハコノ　ナカニ　ナニガ　アリマスカ＝
ハクボクガ　アリマス＝

二　指　導

指導の問題

本課に於ては「○○の　うへ（なか）に　○○があります。」といふ構文及びこれに對する發問を授けるのが主眼である。

また本課に於て「ごらんなさい。」が新出する。しかしこれを始めて用ひる時は急に理解し難いから、これ以前に於て必要の時に用ひ、朧氣にその意味を知らしめて置くことが必要である。

指導の方法

紙數の關係上本課より後は提示の方法のみを掲げることとし、復習、練習のための問答、總括のための問答等を記述しないので、前課までの要領に從って問答を適當に用ひ、指導することを期せられたい。

○ごらんなさい。ここに　つくゑが　あります。
○この　つくゑは　わたくしのです。
○その　つくゑは　どなたのですか。（他の机を指して）
○この　つくゑの　うへに　はこが　あります。
○この　はこは　どなたのですか。
○この　はこの　なかに　なにが　ありますか。
○ごらんなさい。これは　ほんです。
○この　ほんは　どなたのですか。
○この　ほんの　うへに　なにが　ありますか。（箱を載せて）
○この　はこの　なかに　なにが　ありますか。
○ごらんなさい。この　はこの　なかに　はくぼくが　あります。
○これは　はくぼくです。
○ばくぼくは　どこに　ありますか。
○この　ほんの　うへに　なにが　ありますか。
○この　はこは　どなたのですか。

其の他

○板書して教材の讀方指導及び新出文字の指導を行ふこと、及び總括して自答することは前に同じ。

十二課

（教本二十四頁―二十五頁）

一　教　材

新出語　ソバ　ート　シタ

語法　○○ハ　ドコニ　アリマスカ。

○○ト　○○

ナニモ　アリマセン。

發音　ツクエワ　ドコニ　アリマスカ＝

マドノ　ソバニ　アリマス＝

ツクエノ　ウエニ　ナニガ　アリマスカ＝

ペント　エンピツガ　アリマス＝

ツクエノ　ソバニ　ナニガ　アリマスカ＝

イスガ　アリマス＝

ツクエノ　シタニ　ナニガ　アリマスカ＝

ナニモ　アリマセン＝

二　指導

指導の問題

前課よりの繼續として「そばに」「したに」等を提示し又「○○と　○○」の如き並列の「と」を加へて、前課より一層發展した形式を練習せしめるのが要領である。又「なにも　ありません。」といふ否定の形式を會得せしめることも重要なる事項である。

指導の方法

○あれは　なんですか。（机を指して）

○どこに　ありますか。

○まどの　そばに　あります。（自答）

○いすは　どこに　ありますか。

○つくゑの　そばに　あります。（自答する）

○つくゑの　うへに　なにが　ありますか。

○ペンが　あります。えんぴつも　あります。

○つくゑの　うゑに　ペンと　えんぴつが　あります。

○いすと　つくゑ。ほんと　かみ。

あなたと　わたくし。（の如く多數の例を提示する）

○つくゑの　そばに　なにが　ありますか。

○つくゑの　したに　なにが　ありますか。

△なにも　ありません。（身振りを以て何もないことを示しながら）

○いすの　したに　なにが　ありますか。

△なにも　ありません。

備考　「ナニモ　アリマセン。」は東京語では「ナンニモ　アリマセン。」といふが、本書では「ナニモ　アリマセン。」を採った。

十三課

（教本二十六頁―二十七頁）

一　教材

新出語　マヘ　ウシロ　イクツ　カゾヘテ　ヒトツ

フタツ　ミッツ　ヨッツ　イツツ　ーヅツ

新出文字　ゾ　テ　ヨ　ヅ

讀替文字　ッ（促音）

語法　カゾヘテ　ゴランナサイ。

ヒトツ（フタツ、ミッツ、ヨッツ、イツツ）アリマス。

○○ト　○○ガ　イツツヅツ　アリマス。

發音　ワタクシノ　マエニ　ツクエガ　アリマス＝

ワタクシノ　ウシロニモ　ツクエガ　アリマス＝

イクツ　アリマスカ　カゾエテ　ゴランナサイ＝

ヒトツ　フタツ　ミッツ　ヨッツ　イツツ一

イツツ　アリマス＝

イスモ　イツツ　アリマスカ＝

ハイ　イスモ　イツツ　アリマス＝

コノ　ヘヤニ　ツクエト　イスガ　イツツズ＝

ツ　アリマス＝

二　指導

指導の問題

前課よりの繼續として「まへ」「うしろ」の用法を學習させると共に、「ひとつ」より「いつつ」に至るまでの數詞を與へ、又「いくつ」及び「づつ」を學習せしめて、數詞に對する疑問文の練習並に均等なる數量の表はし方を學習せしめるのが主眼である。

指導の方法

○わたくしの　まへに　つくゑが　あります。（机の正面に居て）

○わたくしの　うしろに　こくばんが　あります。（黑板を背に）

○わたくしの　まへに　こくばんが　あります。（前と反對側を向いて）

○わたくしの　うしろに　つくゑが　あります。

○わたくしの　まへに　つくゑが　あります。

○わたくしの　うしろにも　つくゑが　あります。（生徒の机の間に立つて）

○これは　つくゑです。これも　つくゑです。それも　つくゑです。あれも　つくゑです。

○いくつ　ありますか。かぞへて　みませう。ひとつ　ふたつ　みつつ　よつつ　いつつ、いつつ　あります。

○いすは　いくつ　ありますか。ひとつ　ふたつ　みつつ　よつつ　いつつ、いすも　いつつ　あります。

○この　へやに　つくゑが　いつつ　あります。

○この　へやに　いすが　いつつ　あります。

○この　へやに　つくゑと　いすが　いつつづつ　あります。

○帽子、本、其の他を活用して「づつ」の用法を十分に提示する。又必要あらば、「め」、「はな」、「くち」などの新語を與へて「づつ」を例示してもよいが、それらの新語は單に理解を助ける爲に利用する位にしてもよい。

數詞の呼び方が一應學習者の頭にはいったなら「カゾヘテ　ゴランナサイ。」といひながら數へさせるのであるが、これは數へさせる時の言ひ方として理解させ得れば、その意味用法が十分理解されなくても、强ひて說明するには及ばない。

十四課

（教本二十八頁—二十九頁）

一　教材

新出語　チヒサイ　テーブル　パパイヤ　オホキイ　ユカ　カゴ　マンゴスチン　ムッツ　ナナツ　ヤッツ　ココノツ　トヲ

新出文字　ブ　パ　ヲ

讀替文字　ヒ（イ）　ホ（オ）

語法　チヒサイ（オホキイ）○○。

發音　コレワ　チイサイ　テエブルデス。
コノ　ウエニ　パパイヤガ　アリマス。
オオキイ　パパイヤデス。
ユカノ　ウエニ　カゴガ　アリマス。
カゴノ　ナカニ　ナニガ　アリマスカ。
マンゴスチンガ　アリマス。
イクツ　アリマスカ。
ヒトツ　フタツ　ミツツ　ヨツツ　イツツ
ムッツ　ナナツ　ヤッツ　ココノツ　トオ
トオ　アリマス。

二　指導

指導の問題

形容詞が名詞の前に來た時の修飾的用法を提示すると共に、前課の發展として「むつつ」より「とを」までの數詞を學習せしめるのが主眼である。

南方諸地域用のため「パパイヤ」「マンゴスチン」が示されてゐるが、地域により又季節により必ずしもこれらを學習せしめず、その土地に於ける果物を用ひて學習せしめる用意が必要である。

指導の方法

○これは　ちひさい　テーブルです。（掛圖又は略圖により）
○これは　おほきい　テーブルです。
○これは　ちひさい　ほんです。（實物を示して）
○これは　おほきい　ほんです。（　〃　）
○この　テーブルの　うへに　パパイヤが　あります。
○これは　おほきい　パパイヤです。
○これは　ゆかです。（掛圖又は實物を示して）
○ゆかの　うへに　かどが　あります。
○かどの　なかに　マンゴスチンが　あります。
○いくつ　ありますか。
○かぞへて　ごらんなさい。
　ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつつ　むっつ
　ななつ　やっつ　ここのつ　とを　とを　あります。
○黒板に各種の略畫を描き、又は實物を示して「ひとつ」から「とを」までを練習せしめる。

十五課

（教本三十頁―三十一頁）

一　教材

新出語　ドンナ　イロ　アカイ　アヲイ　シロイ　クロイ
語法　ドンナ　イロノ　○○。
發音　ツクエノ　ウエニ　カミガ　アリマス＝
　　ドンナ　イロノ　カミガ　アリマスカ＝
　　アカイ　カミト　アオイ　カミガ　アリマ＝

ス＝
　　シロイ　カミモ　アリマス＝
　　クロイ　カミモ　アリマスカ＝
　　イイエ―クロイ　カミワ　アリマセン＝

二　指導

指導の問題

前課に引續き形容詞の用法の提示である。本課に於ては、赤、青、白、黑の色名と色を問ふときの「どんないろ」といふ形を學習せしめ、色に關する練習問答を十分に行はしめるのが主眼である。

指導の方法

○つくゑの　うへに　かみが　あります。
○どんな　いろの　かみが　ありますか。（自問する）
　あかい　かみが　あります。（自答する）
○あをい　かみも　あります。
○しろい　かみも　あります。
○くろい　かみも　あります。
○これは　どんな　いろの　かみですか。
　あかい　かみです。
○これは　どんな　いろの　かみですか。
　あをい　かみです。
○つくゑの　うへに　どんな　いろの　かみが　ありますか。
○しろい　かみも　ありますか。
　はい、あります。
○くろい　かみも　ありますか。
　いいえ、くろい　かみは　ありません。

十六課

（教本三十二頁―三十三頁）

一　教材

新出語　アツイ　ウスイ　ジビキ　ニッポンゴ
　　シンブン
新出文字　ポ
語　法　アツイ（ウスイ）ノハ　ニッポンゴノ　ホヌデス。
發　音　ココニ　ホンガ　アリマス＝
　　アツイ　ホント　ウスイ　ホンデス＝
　　アツイノワ　ジビキデ　ウスイノワ＝
　　ニッポンゴノ　ホンデス＝
　　ココニ　シンブンモ　アリマスカ＝
　　ハイ　シンブンモ　アリマス＝
　　ニッポンゴノ　シンブンデス＝

二　指　導

指導の問題

前課に引續き形容詞の用法であるが、本課に於てはこれを更に發展せしめて「あついのは」「うすいのは」の如きものをも學習せしめると共に、「○○は○○で××は××です」の二個を連結する「で」の用法を提示するのが主眼である。

指導の方法

○ここに　ほんが　あります。
○これは　あつい　ほんです。
○これは　うすい　ほんです。
○ここに　ほんが　あります。
　あつい　ほんと　うすい　ほんです。
○あつい　ほんは　じびきです。
○うすい　ほんは　にっぽんごの　ほんです。
○あつい　ほんは　じびきで、うすい　ほんは
　にっぽんごの　ほんです。
○これは　しんぶんです。
○これは　にっぽんごの　しんぶんです。
○これは　にっぽんごの　しんぶんでは　ありませ

ん。（日本語以外の新聞を示して）

十七課

（教本三十四頁―三十五頁）

一　教　材

新出語　ダイ　クッビン　イロイロノ　ハナ　ーヤ
　　キイロイ　ムラサキ　モモイロ　クサ
　　キノハ　ミドリ
讀替文字　クヮ
發　音　ダイノ　ウエニ　カビンガ　アリマス＝
　　イロイロノ　ハナガ　アリマス＝
　　アカイ　ハナヤ　キイロイ　ハナヤ＝
　　ムラサキノ　ハナガ　アリマス＝
　　シロイハヤ　モモイロノモ　アリマス＝
　　クサヤ　キノ　ハワ　ドンナ　イロデスカ＝
　　ミドリデス＝

二　指　導

指導の問題

前課に引續き色を示す形容詞を提示するのであるが、本課に於ては紫、綠、桃色等を表はすものを形容詞と對照して學習せしめるのを主眼とする。「きいろい」はその起源に於ては名詞であるが、慣用既に久しきに亙って形容詞として用ひられる方が多いので、形容詞として扱ふこととした。

指導の方法

○これは　だいです。（臺を指して）
○これは　くヮびんです。
○だいの　うへに　くヮびんが　あります。
○くヮびんは　だいの　うへに　あります。
○ここに　いろいろの　はなが　あります。
○あかい　はなや、きいろい　はなが　あります。

○これは　むらさきの　はなです。
○これは　ももいろの　はなです。
○しろいのや　あかいのも　ありますか。
　はい、あります。
○これは　くさで、これは　きです。
○くさや　きの　はは　みどりです。
○みどりの　はなも　ありますか。
　いいえ、みどりの　はなは　ありません。
○この　はなは　どんな　いろですか。
　ももいろです。

十八課

（教本二十六頁―二十七頁）

一　教　材

新出語　ータチ　ミミ　クチ　ハナ　デ　ミー
　　キキー　タベー　カギー

新出文字　メ

語　法　ワタクシタチニハ　メガ　アリマス。
　　ワタクシタチハ　メデ　ミマス。

發　音　ワタクシタチニワ　メト　ミミガ　アリマス。クチモ　アリマス。ハナモ　アリマス。
　　ワタクシタチワ　メデ　ミマス。
　　ミミデ　キキマス。
　　クチデ　タベマス。
　　ハナデ　カギマス。

二　指　導

指導の問題

「わたくしたち」といふ第一人稱の複數を示すもの及び顏の各部分の名稱を與へると共に「めで　みる」「くちで　たべる」の如き手段を示す「で」の用法を學習せしめるのが主眼である。

なほ本課に於て必修補充語の中に「あたま」を加へたが、これはひらがな提示の際に是非必要なのでその準備のためである。

指導の方法

○これは　めです。（眼を指して）
○これは　みみです。
○これは　くちで、これは　はなです。
○これは　あたまです。
○わたくしには　めが　あります。
○わたくしには　めが　ふたつ　あります。
○あなたにも　めが　あります。
○わたくしたちには　めが　あります。
○くちも、みみも、はなも　あります。
○わたくしたちには　あたまも　あります。
○わたくしたちは　めで　みます。
○わたくしたちは　みみで　ききます。
○わたくしたちは　くちで　たべます。
○わたくしたちは　はなで　かぎます。
○わたくしたちは　なんで　みますか。
○めで　みます。

十九課

（教本三十八頁―三十九頁）

一　教　材

新出語　テ　アシ　アルキーモノ　ーヲ　モチー　イヌ
　　ネコ　ケレドモ　サカナ　ヘビ

新出文字　ル　ヌ

語　法　イヌヤ　ネコニモ　アシハ　アリマス。
　　ケレドモ　テハ　アリマセン。
　　サカナヤ　ヘビニハ　テモ　アシモ　アリマセン。

發　音　ワタクシタチニワ　テヤ　アシガ　アリマス。

ワタクシタチワ　アシデ　アルキマス＝
テデ　イロイロノ　モノオ　モチマス＝
イヌヤ　ネコニモ　アシワ　アリマス＝
ケレドモ　テワ　アリマセン＝
サカナヤ　ヘビニワ　テモ　アシモ＝
アリマセン＝

二　指　導

指導の問題

前課に引續き、手段を示す「で」の用法の練習を與へると共に「ものを　もつ」の如き目的を示す助詞「を」や接續詞「けれども」、又並列の否定を表はす「も……も」の如き構文を學習せしめるのが主眼である。

指導の方法

○わたくしたちには　てや　あしが　あります。
○これは　てで、これは　あしです。
○わたくしたちは　あしで　あるきます。
○わたくしたちは　てで　なにを　しますか。
○てで　いろいろの　ものを　もちます。
○これは　いぬで、これは　ねこです。（掛圖又は略圖によって）
○いぬや　ねこにも　あしは　あります。
○けれども　ては　ありません。
○これは　さかなで、これは　へびです。（掛圖又は略圖によって）
○さかなには　ても　あしも　ありません。
○へびには　ても　あしも　ありません。
○さかなや　へびには　ても　あしも　ありません。
○わたくしたちには　てが　あります。
○けれども　いぬや　ねこには　てが　ありません。
○さかなには　くちは　あります。
○けれども　ても　あしも　ありません。

二十課

（教本四十頁―四十一頁）

一　教　材

新出語　ガクカウ　ヲシヘー　ガクカウ　ナラヒー　ミンナ

讀替文字　ガクカウ（ガツコオ）

語　法　アナタガタニ　ニッポンゴヲ　ヲシヘマス。
ミンナ　コノ　ホンデ　ニッポンゴヲ　ナラヒマス。

發　音　ワタクシワ　アナタガタノ　センセエデス＝
アナタガタニ　ニッポンゴオ　オシエマス＝
アナタガタワ　セエトデス＝
コノ　ガツコオノ　セエトデス＝
アナタガタワ　ニッポンゴオ　ナライマス＝
ミンナ　コノ　ホンデ　ニッポンゴオ
ナライマス＝

二　指　導

指導の問題

第二人稱の複數形を示すと共に、前課で始めて學習した動詞とその目的を示す「を」の用法に習熟せしめ、更に對象を示す「に」及び教師側よりの「をしへる」、學習者側よりの「ならふ」といふ對語や、「がくから」「みんな」等の語彙を習得せしめるのが主眼である。

指導の方法

○あなたは　せいとです。（學習者の一人を指し）
○あなたも　せいとです。
○あなたがたは　みんな　せいとです。
○あなたがたは　このがくからの　せいとです。
○わたくしは　せいとでは　ありません。せんせいで

す。

○わたくしは　あなたがたの　せんせいです。

○あなたがたは　わたくしの　せいとです。

○わたくしは　あなたがたに　につぽんごを　をしへます。

○あなたがたは　につぽんごを　ならひます。

○なんで　につぽんごを　ならひますか。

この　ほんで　ならひます。

二十一課

（教本四十二頁—四十三頁）

一　教　材

新出語　（オ）ダシー　（オ）アケ　（オ）トジー　（オ）シマヒー　スズキ　（オ）アゲー　ーマシタ　ドチラ　ヒダリ

新出文字　ヂ　ゲ

語　法　ホンヲ　オダシ（オアケ、オトヂ、オシマヒ）ナサイ。

○○サンガ　テヲ　アゲマシタ。

發　音　ホンオ　オダシナサイ＝

ホンオ　オアケナサイ＝

ホンオ　オトジナサイ＝

ホンオ　オシマイナサイ＝

スズキサン　テオ　オアゲナサイ＝

スズキサンガ　テオ　アゲマシタ＝

ドチラノ　テオ　アゲマシタカ＝

ヒダリノ　テオ　アゲマシタ＝

二　指　導

指導の問題

本課以下數課に亙って「お○○なさい。」といふ命令の形を習得させるのが要領である。これは目下の者に對する言葉遣である。

この構文は既に教室用語として或程度聞き馴れてゐるはずであるが、これを意識的に學習せしめるのが本課の新しい任務である。しかし教室では學習者の目下の者が居ないため、その練習は困難であるから、自由に聽き分けて、實際の場合に用ひ得る程度に止めなくてはならない。

第二の要點は「○○ました」といふ過去の時を示す表現法を學習せしめることである。

指導の方法

○わたくしは　ほんを　だします。（本を取出しながら）

○わたくしは　ほんを　だしました。（少し過ぎて）

○ほんを　おだしなさい。（身振りで示しながら）

○わたくしは　ほんを　あけます。

○ほんを　おあけなさい。

○ほんを　おとぢなさい。

○ほんを　おしまひなさい。

○わたくしは　てを　あげます。

○□さん、てを　おあげなさい。

○□さんは　てを　あげました。

○これは　みぎの　てで、これは　ひだりの　てです。

○□さんは　どちらの　てを　あげましたか。

○□さんは　ひだりの　てを　あげました。

備　考　「お○○なさい」の「お」を省いた形は本書では採らなかった。

二十二課

（教本四十四頁—四十五頁）

一　教　材

新出語　タケダ　（オ）タヂー　ーヘ　オイデー　トコロ　ソト　（オ）デー　（オ）ハイリー　（オ）シメー

語法　セキ　(オ)カヘリー　(オ)カケー
ココヘ　オイデナサイ。
ヘヤノ　ソトヘ　オデナサイ。
ヘヤノ　ナカヘ　オハイリナサイ。

發音　タケダサン　オタチナサイ＝
ココエ　オイデナサイ＝
トノ　トコロエ　オイデナサイ＝
トオ　オアケナサイ＝
ヘヤノ　ソトヘ　オデナサイ＝
ヘヤノ　ナカエ　オハイリナサイ＝
トヲ　オシメナサイ＝
アナタノ　セキエ　オカエリナサイ＝
オカケナサイ＝

二　指導

指導の問題

立上ってから席へ歸るまでの連鎖的行動の言語化である。これは主として聽き方の材料であって、學習者が言ふ部面は殆どない。しかし斯樣な練習は言語習得には極めて有效なものであるから、これを適當に活用することは有利である。なほ必要や學力に應じ、各動作の前に「わたくしは　○○します。」といはせ、動作の後に「わたくしは　○○しました。」といはせるのも一法である。

指導の方法

○□さん、おたちなさい。(手で示して)
○ここへ　おいでなさい。(手招きしながら)
○との　ところへ　おいでなさい。(戸の方を指して)
○とを　おあけなさい。
○へやの　そとへ　おでなさい。
○□さん、へやの　なかへ　おはいりなさい。
○とを　おしめなさい。
○あなたの　せきへ　おかへりなさい。
○おかけなさい。(手で示しながら)
○××さん　おたちなさい。
○あなたは　なにを　しましたか。
○まどの　ところへ　おいでなさい。
○まどを　おあけなさい。
○まどを　おしめなさい。
○あなたの　せきへ　おかへりなさい。
○おかけなさい。

二十三課

(教本四十六頁—四十七頁)

一　教材

新出語　ヨシダ　ナマヘ　(オ)カキー　イマ　ヨクデキー

語法　コクバンニ　カキマシタ。
ヨク　デキマシタ。

發音　ヨシダサン—コクバンノ　トコロエ　オイデナサイ＝
アナタノ　ナマエオ　オカキナサイ＝
アナタワ　イマ　ナニオ　カキマシタカ＝
ワタクシノ　ナマエオ　カキマシタ＝
ナニニ　カキマシタカ＝
コクバンニ　カキマシタ＝
ナンデ　カキマシタカ＝
ハクボクデ　カキマシタ＝
ソオデス＝ヨク　デキマシタ＝
アナタノ　セキエ　オカエリナサイ＝

二　指導

指導の問題

前課に引續き一連の行動をなさしめ、それに基いた問答により過去形、動詞の目的を示す「を」の用法等を練習せしめ、更に「に」「で」「へ」等の助詞の用法等

を練習せしめるのを主眼とする。

「さうです。よく　できました。」は、從來に於ても教室用語中に用ひ來ったものであるが、本課よりこれを自由に且十分に用ひて、その意味を意識的に知るやうに指導する。

指導の方法

○あなたの　なまへは　□　ですか、××ですか。
△××です。
○××さん、こくばんの　ところへ　おいでなさい。
○あなたは　どこへ　いきましたか。
○こくばんに　あなたの　なまへを　おかきなさい。
○あなたは　いま　なにを　かきましたか。
○さうです。よく　できました。
○なにに　かきましたか。
○なんで　かきましたか。
○さうです。よく　できました。

○あなたの　せきへ　おかへりなさい。
○あなたは　どこへ　かへりましたか。
○さうです。よく　できました。
○△△さん、××さんは　どこへ　いきましたか。
○それから　なにを　かきましたか。
○なにに　かきましたか。
○なんで　かきましたか。
○それから　どこへ　かへりましたか。
○さうです。よく　できました。

二十四課

（教本四十八頁—四十九頁）

一　教　材

新出語　キップ　キシャ　イクー　ーマイ　イチー　ニー　サンー　ヨー　ゴー　カラ　ジュンニ

新出文字　プ

讀替文字　ジュ

語　法　イチ（ニ、サン、ヨ、ゴ）マイ
ジュンニ　カゾヘテ　ゴランナサイ。

發　音　コレワ　キップデス＝
ナンノ　キップデスカ＝
キシャノ　キップデス＝
イクマイ　アリマスカ＝
イチマイ　ニマイ　サンマイ　ヨマイ
ゴマイ　ゴマイ　アリマス＝
イチマイカラ　ジュンニ　カゾエテ
ゴランナサイ＝

二　指　導

指導の問題

本課に於て始めて拗音「きしゃ」が出る。これらの發音指導、及び助數詞「枚」と共に、「いち」「に」より「じ」に至る數のかぞへかたを指導するのが本課の趣旨である。

指導の方法

○これは　きしゃです。（繪を示して）
○これはきっぷです。（實物を示し）
○これは　なんの　きっぷですか。
○きしゃの　きっぷです。（自答する）
○これは　でんしゃの　きっぷです。（實物を示して）
○これは　きしゃの　きっぷですか、でんしゃの　きっぷですか。
○いくまい　ありますか。かぞへて　みませう。
いちまい　にまい　さんまい　よまい　ごまい、どまい　あります。
○いま　いくまい　ありますか。（數を變へて）
○さうです　よく　できました。
○いちまい　にまい　さんまい　よまい　ごまい。
わたくしは　いちまいから　じゅんに　かぞへまし

た。

○いちまい　よまい　ごまい、これは　じゅんでは　ありません。

○さあ、いちまいから　じゅんに　かぞへませう。

○□さん、きしゃの　きっぷが　いくまい　ありますか。

○いちまいから　じゅんに　かぞへて　ごらんなさい。

○さうです。よく　できました。

其の他

備考　必要なら「よまい」は「しまい」ともいふことを説明し又提示してもよい。

二十五課

（教本五十頁—五十一頁）

一　教材

新出語　イロガミ　タクサン　チャイロ　ジフ　イッショニ

讀替文字　チャ　ジフ（ジュウ）　ショ

語法　○○ガ　タクサン　アリマス。

ミンナデ　イクマイ　アリマスカ。

イチマイカラ　ジフマイマデ　イッショニ　カゾヘテ　ゴランナサイ。

發音　イロガミガ　タクサン　アリマス。

シロイ　カミガ　イチマイ。　アカイノガ　ニマイ。　アオイノガ　サンマイ。　チャイロノガ　ヨマイ　アリマス。

ミンナデ　イクマイ　アリマスカ。

ジュウマイ　アリマス。

イチマイカラ　ジュウマイマデ　イッショニ　カゾエテ　ゴランナサイ。

二　指導

指導の問題

前課に引續き「ろくまい」から「じふまい」までの數へ方に習熟せしめると共に、「から」「まで」の用法を知らしめ、「たくさん」「いっしょに」等の副詞を學習せしめるのが主眼である。

指導の方法

○これは　いろがみです。（色紙を示して）

○ここに　いろがみが　たくさん　あります。

○しろい　かみが　いちまい　あります。

○あかいのは　にまい　あります。

○ちゃいろのは　いくまい　ありますか。

○みんなで　いくまい　ありますか。

○□さん、いちまいから　ごまいまで　かぞへてごらんなさい。

○みなさんも　いっしょに　かぞへて　ごらんなさい。

○ろくまい　しちまい　はちまい　くまい　じふまい。みなさん、かぞへて　ごらんなさい。

○××さん、ろくまいから　じふまいまで　かぞへてごらんなさい。

○こんどは　みなさん　いっしょに　かぞへて　ごらんなさい。

二十六課

（教本五十二頁—五十三頁）

一　教材

新出語　ヒト　オホゼイ　キー　フトコ　ーニン　ヒトリ　フタリ　サンナ　コドモ

新出文字　ゼ　キ

語法　コノ　ヘヤニ　ヒトガ　オホゼイ　キマス。

發音　コノ　ヘヤニ　ヒトガ　オオゼエ　イマス。

オトコノ　ヒトワ　イクニン　イマスカ。

ヒトリ　フタリ　サンニン　ヨニン　ゴニン

ロクニン　シチニン　ハチニン　クニン　ジユウニン　ジユウイチニン　ジユウニニン　ジユウニニン　イマス。

オンナノ　ヒトワ　イクニン　イマスカ。

ゴニン　イマス。

コノ　ヘヤニ　コドモモ　イマスカ。

イイエ、コドモワ　イマセン。

二　指　導

指導の問題

人や動物の存在を示す「おります」の用法を示して「あります」との區別を明かにし、「ひとり」から「じふにん」までの數へ方を學習せしめるのが主眼である。

なほ平がなの提示の必要上本課に於て「くるま」といふ語を補充語として學習せしめる。

指導の方法

○あなたは　ひとです。わたくしも　ひとです。

○この　へやに　ひとが　おほぜい　ゐます。

○「おほぜい」は「たくさん」と　おなじです。

○この　へやに　つくゑが　たくさん　あります。

○いすも　たくさん　あります。

同樣にして「ゐます」と「あります」の區別を示す。

○これは　をととのひとです。

○これは　をんなのひとです。

○この　ゑの　なかに　をととのひとは　いくにん　ゐますか。

○をんなのひとは　いくにん　ゐますか。

○この　へやに　テーブルが　いくつ　ありますか。

○まどは　いくつ　ありますか。

○ひとりから　じふしちにんまで　かぞへて　ごらんなさい。

○みんなで　いつしよに　かぞへて　ください。

○この　へやに　こどもも　ゐますか。

○これは　くるまです。（車を描いて）

○これは　きしやの　くるまです。

○きしやには　くるまが　たくさん　あります。

○でんしやにも　くるまが　たくさん　あります。

○この　でんしやには　くるまが　いくつ　ありますか。（電車の圖を描いて）

備　考　人力車のある地方ならば、それを「くるま」と呼ぶことを教へ、更にそれを教へるには「一だい」「二だい」と呼ぶことを教へても差支ない。

二十七課

（教本五十四頁—五十五頁）

一　教　材

新出語　ケウシツ　タツテ　コシカケテ　ーグラキ　ージフ（ュン）　シテ　ベンキャウシテ

讀替文字　ケウ（キヨオ）　キャウ（キヨオ）

語　法　センセイハ　タツテ　キマスガ、セイトハ　ミンナ　コシカケテ　キマス。

セイトハ　イクニングラキ　キマスカ。

發　音　ココワ　キヨオシツテス。

セエトガ　オオゼエ　イマス。

センセエワ　タツテイマスガ、セエトワ　ミンナ　コシカケテ　イマス。

セエトワ　イクニングライ　イマスカ。

ゴジユウニングライ　イマス。

ミンナ　ナニオ　シテイマスカ。

ニツポンゴオ　ベンキヨオシテ　イマス。

二　指　導

指導の問題

「たつて　ゐます」「としかけて　ゐます」の如き助動詞的の「ゐます」の用法を提示して、これが狀態又は繼續を表はすものなることを學習せしめるのが主眼である。

指導の方法

○ここは　けふしつです。
○みなさんは　けふしつに　ゐます。
○けふしつには　せいとが　おほぜい　ゐます。
○この　ゑを　ごらんなさい。
○これは　せんせいで、これは　せいとです。
○せんせいは　いくにん　ゐますか。
○せいとは　ひとり　ゐますか、おほぜい　ゐますか。
○せいとは　いくにんぐらゐ　ゐますか。
○わたくしは　たって　ゐます。
○あなたがたは　こしかけて　ゐます。
○この　せんせいは　たって　ゐますが、せいとは　みんな　こしかけて　ゐます。
○この　せんせいは　にっぽんごを　をしへて　ゐます。
○この　せいとは　なにを　して　ゐますか。
○あなたがたも　にっぽんごを　べんきやうして　ゐますか。
○わたくしは　なにを　して　ゐますか。
○この　へやに　せいとは　いくにんぐらゐ　ゐますか。
○みんな　たって　ゐますか、こしかけて　ゐますか。

二十八課

（教本五十六頁—五十七頁）

一　教材

新出語　ワカリー　マダ　ムヅカシイ　デセウ　ムヅカシク　アマリ　ヤサシク

讀替文字　セウ〔ショオ〕

語法　ニッポンゴガ　ワカリマスカ。

マダ　ヨクハ　ワカリマセン。
ニッポンゴハ　ムヅカシイデセウ。
ムヅカシクハ　アリマセンガ、ヤサシクモ　アリマセン。

發音

アナタワ　ニッポンゴガ　ワカリマスカ＝
ハイ—ワカリマス＝
ヨク　ワカリマスカ＝
イイエ—マダ　ヨクワ　ワカリマセン＝
ニッポンゴワ　ムズカシイデショオ＝
イイエ—ムズカシクワ　アリマセンガ—アマリ　ヤサシクモ　アリマセン＝

二　指導

指導の問題

「わかる」といふ自動詞を提示すると共に「よく」の如き形容詞の副詞形、「まだ」の如き副詞、及び否定文に用ひる形容詞の變化等を學習せしめるのが主眼である。

なほ「でせう」といふ推量の形も、正式には本課に於て始めて提示されるのである。

指導の方法

○あなたは　いま　なにを　ならって　ゐますか。
○にっぽんごが　わかりますか。
○よく　わかりますか。
○にっぽんごが　みんな　わかりますか。
○すこし　わかりますか。
○さうです。みなさんは　にっぽんごが　わかります。けれども　まだ　よくは　わかりません。
○にっぽんごは　むづかしいでせう。
○わかりますか。いいえ、まだ　よく　わかりませんでせう。
○にっぽんごは　むづかしくは　ありません。
○けれども　あまり　やさしくも　ありません。

二十九課

（教本五十八頁—五十九頁）

一　教　材

新出語　ジ　イフ　ヨンデ

新出文字　あ　い　う　え　お

讀替文字　イフ（ユウ）

語　法　コレハ　ナント　イフ　ジデスカ。

コレハ「ア」ト　イフ　ジデス。

發　音　ワタクシワ　コクバンニ　ジオ　カキマシタ。

「あ」コレワ「ア」ト　ユウ　ジデス。

「い」コレワ「イ」ト　ユウ　ジデス。

「う」コレワ　ナント　ユウ　ジデスカ。

「ウ」ト　ユウ　ジデス。

「え」コノ　ジオ　ヨンデ　クダサイ。

「エ」デス。

「お」コノ　ジオ　ヨンデ　クダサイ。

「オ」デス。

ソオデス。ヨク　デキマシタ。

二　指　導

指導の問題

平假名に入る準備として、その字形及び讀方を示すと共に、直接法教授に必要な「……といふ」の形を提示するのが主眼である。

指導の方法

○わたくしは　とくばんに　じを　かきました。

○いくつ　かきましたか。

○これは「あ」と　いふ　じです。

○これは「い」と　いふ　じです。

○これは　なんと　いふ　じですか。

○この　じを　よんで　ください。

○あなたは　なんと　いふ　なまへですか。

○これは　なんと　いふ　がくかうですか。

三十課

（教本六十頁—六十一頁）

一　教　材

新出語　テン　ネ　ニゴリ　イヒ　ドオ　イミ

新出文字　ぎ　ぐ　げ

語　法　コノ　ジニハ　テンガ　フタツ　アリマスネ。

コノ　テンヲ　ニゴリト　イヒマス。

ゴランナサイト　イフノハ　ドウ　イフ　イミデスカ。

「ミナサイ」ト　イフ　イミデス。

發　音　「ギ」コノ　ジワ「キ」デスカ「ギ」デスカ。

「ギ」デス。

ソオデス。コノ　ジニワ　テンガ　フタツ　アリマスネ。コノ　テンオ「ニゴリ」ト　イイマス。

「グ」コレワ「グ」ト　ユウ　ジデス。

「ゲ」コレワ　ナント　ユウ　ジデスカ。

「ゲ」デス。

「ゴランナサイ」ト　ユウノワ　ドオ　ユウ　イミデスカ。

「ミナサイ」ト　ユウ　イミデス。

二　指　導

指導の問題

前課に引續き「といふ」「どういふ」などを學習せしめて問答による教授を容易ならしめるのを主眼とする。

又「ね」といふ感動の詞を示したのは、既に教室内に於て極めて頻繁に用ひられた筈であるから、それに基づいて本課に於て練習せしめることとした。

指導の方法

○わたくしは　じを　かきました。
○この　じには　てんが　ふたつ　ありますね。
○これは「き」です。
○これは「き」と　いふ　じです。（「き」と書いて）
○この　じには　てんが　ありませんね。
○これは「ぎ」です。
○この　てんを　にごりと　いひます。
○これは「ぐ」といふ　じです。
○これには　てんが　ありますね。
○いくつ　ありますか。
○「ごらんなさい」と　いふのは　どう　いふ　いみですか。

其の他

五十音圖について

以上三十課中に、五十音圖中直音の全部及び拗音、促音の一部が提示してあるから、これを用ひて發音練習をなし、又片かなの讀方の總括をすることが出來る。發音練習の際にはガ行の次にガギグゲゴを補ひチ、ヅ、キ、エがジ、ズ、イ、エと發音が同樣であることを指示して正書法と發音との差違を知らしめる。

なほンを「ウン」といふのは、この文字の名稱であって、發音ではないことにつき、特に注意して指導すべきである。

平がなの提示法

以下七課中に平がなの直音全部を示した。拗音、促音等は示してないが、片假名からの類推によりこれを理解せしめることは容易である。

平がなを學習せしめる期間中は平がなの習得及び既習三十課の總復習を目的としてゐるから、問答は總てこれまでの復習に止め、これが自在なる活用を圖り、從來稍機械的に陷りやすかった問答を日常自然の會話に近からしめることが必要である。

始めの四課に於ける單語は全部既習のものであるから、挿繪と對照することにより、直ちに平がな個々の音價を知ることが出來る。各頁の後半は既習の平がなの應用である。

五課以下に於ても、文脈によりこれに用ひられた平がなを推定することは困難ではない。提示の方法は第二十九課及び第三十課に示した要領によるべく、書方の指導の際には、字形及び運筆の順序に特に留意することが肝要である。なほ必要あらば小カードを用ひ、表に平がな、裏に片かなを記さしめ、それを利用して學習せしめるのも有効である。

三十一課

（教本六十二頁—六十五頁）

一　教材

新出文字　はこかみほんなくさきのてしあたまとつゑすぬねめちひふへやゆくるまぶぴけごむれーはろでそわりどらせにづもをよゐぺ

一　教材

新出語　ゑーさつ　ひだり　みぎ　おなじ　ながさ　もう　みじかい　はう　みえー　しか　かげ　かくれて

讀替文字　もう（モオ）

語法　ひだりの　ほんは　あつくて　くろいのです。

いっぽんは　ながくて　もう　いっぽんは　みじかいのです。

○○と　××と　どちらが　ながいのですか。

○○の　はうが　ながいのです。

さんぼんしか　みえません。

發音

コノ　エオ　ゴランナサイ＝

ツクエノ　ウエニ　ホンガ　ニサツト　エンピツガ　ニホン　アリマス＝

ヒダリノ　ホンワ　アツクテ　クロイノデスガ　ミギノワ　ウスクテ　アオイ　ホンデス＝

エンピツワ　オナジ　ナガサデスカ＝

イイエ　イッポンワ　ガクテ　モオ　イッポンワ　ミジカイノデス＝

アカイ　エンピツト　キイロイ　エンピツト　ドチラガ　ナガイノデスカ＝

アカイ　エンピツノ　ホオガ　ナガイノデス＝

ツクエノ　アシワ　シホントモ　ミエマスカ＝

イイエ　サンボンシカ　ミエマセン＝イッポンワ　コノ　アシノ　カゲニ　カクレテ　イマス＝

二　指導

指導の問題

形容詞が並列する場合、形容詞が他の節につづく場合等に於ける中止法の用法と共に、二つの事物を比較する際の表現法を學習せしめるのが本課の主眼である。これと共に「いっぽん……もう　いっぽん」の如き二つの事物の呼び方、「しか……ません」の如き表現法の指導も重要なものである。

なほ「ひだり」「みぎ」を教へる際には、學習者と同じ方向を向いて提示することが必要である。

指導の方法

○つくゑの　うへに　なにと　なにが　ありますか。

（本二冊と鉛筆二本を置いて）

○さうです。ほんは　いっさつ　にさつ　さんさつと　かぞへます。

○えんぴつは　いっぽん　にほんと　かぞへます。

○つくゑの　うへに　ほんは　いくさつ　ありますか。

○さうです。それでは　えんぴつは　いくぼん　ありますか。

○ひだりの　ほんは　あつい　ほんです。さうして　くろい　ほんです。

○ひだりの　ほんは　あつくて　くろいのです。

○みぎのは　うすい　ほんです。さうして　あをい　ほんです。

○みぎのは　うすくて　あをい　ほんです。

○この　ほんの　あつさは　おなじでは　ありません。

○いっさつは　あつくて、もう　いっさつは　うすいのです。

○この　えんぴつも　おなじ　ながさですか。

○いいえ、いっぽんは　ながくて　もう　いっぽんは　みじかいのです。

○この　えんぴつは　おなじ　いろですか。

○いいえ、いっぽんは　あかい　えんぴつで、もう　いっぽんは　きいろい　えんぴつです。

○あかい　えんぴつと　きいろい　えんぴつと　どちらが　ながいのですか。

○それでは　どちらが　みじかいのですか。

○くろい　ほんと　あをい　ほんと　どちらが　あつ

いのですか。

○それでは　どちらが　うすいのですか。

○これは　ほんです。みなさんには　この　ほんが　みえます。ほんの　うしろに　えんぴつが　あります。けれども　みなさんには　みえません。　えんぴつは　ほんの　かげに　かくれて　ゐます。（本のうしろに短い鉛筆をかくして）

同樣なことを各種の物について行ひ、「みえる」を提示する。

○この　ゑを　ごらんなさい。

○この　つくゑの　あしは　しほん　あります。

○けれども　しほん　みえません。

○さんぼんしか　みえません。

○いつぽんは　この　あしの　かげに　かくれて　ゐます。

○この　つくゑの　うへに　ほんが　たくさん　ありますか。

いいえ、にさつしか　ありません。

○えんぴつは　たくさん　ありますか。

いいえ、にほんしか　ありません。

二

一　教　材

新出語　なり　くらべて　一ぱい　はんぶん　三ぶんの一

新出文字　一　二　三　四　五　六　七　八　九　十

讀替文字　はち（**ホオ**）

語　法　一と　二で　三に　なります。

九は　八より　おほきいのです。

七の　二ばいは　十四です。

三は　九の　三ぶんの一です。

發　音　**イチト　ニデ　サンニ　ナリマス**

シト　ゴデ　イクツニ　ナリマスカ

クニ　ナリマス　　**ロクト　シチト**

ドチラガ　オオキイノデス　カ

シチノ　ホオガ　オオキイノデス

ハチト　クオ　クラベテ　ゴランナサイ

クワ　ハチヨリ　オオキイノデス

ハチワ　クヨリ　チイサイノデス

シチノ　ニバイワ　ジュウシデス

ゴノ　サンバイワ　イクツデスカ

ジュウゴデス

ロクワ　ジュウニノ　ハンブンデス

サンワ　クノ　サンブンノイチデス

二　指　導

指導の問題

成人にとり普遍的の知識である計數により、大小の比較の表し方また倍數、分數の表現法を習得せしめることを主眼とする。

いち、に、さん等は助數詞と共に提示されて既習のものであるが、本課に於ては數として單獨に用ひる。從つて四は「し」と呼ぶのを本體とする。

なほ本課より本文中に漢字が與へられてゐる。これが指導の要領は平がなの場合と同樣であるが、その字形、筆順等に十分注意して指導することが肝要である。

指導の方法

○これは　一で、これは　二です。（數字を板書して）

○一と　二で　三に　なります。

○二と　三で　五に　なります。

其の他

○四と　五で　いくつに　なりますか。

○六と　七と　どちらが　おほきいのですか。

○五と　六と　どちらが　ちひさいのですか。

○八と　九を　くらべて　みませう。

○九は　八より　おほきいのです。
○八は　九より　ちひさいのです。
○五と　六を　くらべて　ごらんなさい。
○二の　三ばいは　六です。
○三の　二ばいも　六です。
○七の　二ばいは　いくつですか。
○それでは　五の　三ばいは　いくつですか。
○十の　はんぶんは　五です。
○五は　十の　はんぶんです。
○六は　十二の　はんぶんです。
○十二の　はんぶんは　いくつですか。
○七は　いくつの　はんぶんですか。
○三は　九の　三ぶんの　一です。
○二は　六の　三ぶんの　一です。
○九の　三ぶんの　一は　三です。
○四は　いくつの　三ぶんの　一ですか。
○十五の　三ぶんの　一は　いくつですか。
○はんぶんは　二ぶんの　一とも　いひます。
○はんぶんと　二ぶんの　一は　おなじです。
○八の　四ぶんの　一は　二です。
○二は　八の　四ぶんの　一です。
○四は　六の　三ぶんの　二です。
○十五の　三ぶんの　二は　いくつですか。

三

一　教材

新出語　ひくのとり　たす　百　千　万　十ぶんの一
新出文字　百〔ヒヤク〕千〔セン〕万〔マン〕
讀替文字　百〔ヒヤク〕〔ビヤク〕千〔セン〕
語法　十から　三を　ひくと　七が　のこります。
發音　ジユウカラ　サンオ　ヒクト　シチガ　ノコリマス＝
クカラ　ゴオ　ヒクト　シガ　ノコリマス＝
ロクニ　サンオ　タスト　クニ　ナリマス＝
シチニ　シオ　タスト　イクツニ　ナリマスカ＝
ジユウイチニ　ナリマス＝
ジユウノ　ジユウバイワ　ヒヤクデ　ヒヤクノ　ジユウバイワ　センデス＝
センノ　ジユウバイワ　イチマンデ　イチマンノ　ジユウバイワ　ジユウマンデス＝
ニジユウノ　ジユウバイト　サンノ　ジユウバイデ　イクツニ　ナリマスカ＝
ニヒヤクサンジユウニ　ナリマス＝
サンビヤクノ　ジユウブンノイチワ　イクツデスカ＝
サンジユウデス＝

二　指導

指導の問題

前課に引續き計數により「……と」といふ條件を表はす形式を學習せしめると共に、加法、減法の表現法を習得せしめ、且倍數及び分數の數へ方を學習せしめるのが主眼である。

指導の方法

○十から　三を　ひくと　七が　のこります。
（式を板書して）
○九から　四を　ひくと　五が　のこります。
○八から　五を　ひくと　いくつが　のこりますか。
其の他
○六に　三を　たすと　九に　なります。
（式を板書して）
○五に　四を　たすと　九に　なります。
○四に　五を　たすと　いくつに　なりますか。

○それでは　七に　四を　たすと　いくつに　なりますか。

○十の　十ばいは　百です。
○百の　十ばいは　千です。
○千の　十ばいは　一万です。
○一万の　十ばいは　十万です。
○百の　二十ばいは　二千です。
○千の　五ばいは　いくつですか。
○二十の　十ばいと　三の　十ばいで　いくつになりますか。
○十は　百の　十ぶんの　一です。
○二十の　十ぶんの　一は　いくつですか。
○三百の　十ぶんの　一は　いくつですか。

其の他

○五の　五ばいは　いくつですか。
○六の　七ばいは　いくつですか。
○八の　九ばいは　いくつですか。

四

一　教　材

新出語　さいふ　おかね　いくら　はいって　ねる　あけて　一せん　さつ　一ゑん　どれ　もっと　ありがたう　ございます

讀替文字　十〔ジッ〕　たう〔トオ〕

語　法　いくら　はいって　ねるでせう。　あけて　みませう。　一ぜんと　五せんと　十せんの　なかで、　どれが　一ばん　おほきいのですか。　十せんが　一ばん　おほきいのです。　もっと　おほきいのは　ありませんか。　ありがたう　ございます。

發　音　コレワ　ワタクシノ　サイフデス＝

コノ　ナカニ　オカネガ　ハイッテ　イマス＝
イクラ　ハイッテ　イルデショオ＝
ワカリマセン＝
ソレデワ　アケテ　ミマショオ＝
ゴランナサイ＝コレワ　ゴジッセンサツデ　コレワ　ゴエンサツデス＝
コレワ　イッセンデ　コレワ　ゴセンデス＝
サイフノ　ナカニ　ゴエンサツガ　イチマイ　ゴジッセンサツガ　ニマイ　ジッセンガ　ミッツ　ゴセンガ　ヒトツ　イッセンガ　フタツ　アリマス＝ミンナデ　イクラデスカ＝
ロクエン　サンジュウナナセンデス＝
イッセント　ゴセント　ジッセンノ　ナカデ　ドレガ　イチバン　オオキイノデスカ＝
ジッセンガ　イチバン　オオキイノデス＝
×　×　×
コレワ　イクラデスカ＝
ヒトツ　ゴセンデス＝
モット　オオキイノワ　アリマセンカ＝
ハイ　アリマス＝コレワ　ヒトツ　ロクセンデス＝
ソレオ　イッツ　クダサイ＝
アリガトオ　ゴザイマス＝ミンナデ　サンジッセンデス＝

二　指　導

指導の問題

數教材の發展として金錢の數へ方を學習せしめ、構文としては三つ以上のうち最大のものの言ひ表はし方、及びそれを導く疑問形等を習得せしめるのが主眼である。課の終りに金錢に關聯した簡單な會話を示した。かかる教材は問答による教授には適しないので、ややもすれば讀方教授に墮し易いから、努めて問答中

に織込み、文意の完全に理解されるまで運用し、讀方の指導に至った時に不明な個所のないやうに指導することが肝要である。

指導の方法

○これは　わたくしの　さいふです。（財布を示して）
○この　なかに　おかねが　はいって　ゐます。
○いくら　はいって　ゐるでせう。
○わかりますか。
○それでは　あけて　みませう。
○わたくしは　さいふを　あけました。
○この　なかに　なにが　はいって　ゐますか。
○ごらんなさい。これは　さつです。
○これは　五ゑんさつで、これは　五十せんさつです。（實物を示す）
○これは　一せんで、これは　五せんです。（實物を示す）
○これは　十せんです。
○五十せんさつが　二まいで　いくらに　なりますか。
○ここに　十せんが　みっつと　五せんが　ひとつあります。みんなで　いくらですか。

其の他

○一せんと　五せんと　どちらが　おほきいのですか。
○五せんと　十せんと　どちらが　おほきいのですか。
○一せんと　五せんと　十せんの　なかで、どれが　一ばん　おほきいのですか。
○ここに　うちが　みっつ　あります。（板畫して）この　なかで　どれが　一ばん　おほきいのですか。

同樣な例を出して多くの練習を與へる。

○この　えんぴつは　いっぽん　五せんです。

○それは　いっぽん　いくらですか。
○あなたの　えんぴつを　ください。
○ありがたう　ございます。
○もっと　ながいのは　ありませんか。
○この　えんぴつは　五せんで、この　えんぴつは　三せんづつです。みんなで　いくらですか。

五

一　教　材

新出語　とけい　すうじ　また　はり　ながく　りゃうはう　さす　ちゃうど　一じ　一じかん　一ぷん　一にち　いま　なんじ　あひだ　さして　一はん　一まへ

讀替文字　すう（スウ）　りゃう（リョオ）　ちゃう（チョオ）

語　法

一じかんは　六十ぷんで　一にちは　二十四じかんです。
みじかい　はりは　三と　四の　あひだを　さして　ゐます。

發　音

コレワ　トケエデス＝
イチカラ　ジュウニマデノ　スウジガ　カイテ　アリマス＝
マタ　ニホンノ　ハリガ　アリマス＝
イッポンワ　ナガクテ　モオ　イッポンワ　ミジカイノデス＝
リョオホオノ　ハリガ　ジュウニオ　サスト　チョオド　ジュウニジデス＝
イチジカンワ　ロクジップンデ　イチニチワ　ニジュウヨジカンデス＝
イマ　ナンジデスカ＝
クジ　ジュウゴフンデス＝
イマ　ミジカイ　ハリワ　サント　シノ　ア＝

イダオ　サシテ　イマス＝
ナガイ　ハリワ　ロクオ　サシテ　イマス＝
ナンジデスカ＝
サンジハンデス＝
ナガイ　ハリガ　クオ　サスト　ナンジニ
ナリマスカ＝
ヨジ　ジユウゴフンマエニ　ナリマス＝

二　指　導

指導の問題

時間の呼び方及び時間に關係ある語彙を學習せしめるのが本課の主眼である。

本課には他動詞を以て狀態を表はす形、「かいてあります。」がある。この意味は直接法で提示する場合、なかなか理解し難いものであるから、多くの例を以て示す必要がある。

指導の方法

○これは　とけいです。（實物を示して）
○とけいには　一から　十二までの　すうじが　かいて　あります。
○わたくしは　いま　一から　十二までの　すうじを　かいて　ゐます。（板書しながら）
○どらんなさい。この　こくばんに　一から　十二までの　すうじが　かいて　あります。
○この　こくばんには　なにが　かいて　ありますか。
○一から　十二までの　すうじが　かいて　あります。（自答する）
○どらんなさい。あの　まどは　あけて　あります。
○あの　まどは　あいて　ゐます。
○「あけて　あります。」と「あいて　ゐます。」は　おなじ　いみです。

○つくゑの　うへに　ほんが　おいて　あります。
○この　ほんは　あけて　ありますか、とぢて　ありますか。

其の他

○とけいには　二ほんの　はりが　あります。
○いっぽんは　ながくて、もう　いっぽんは　みじかいのです。
○どちらの　はりが　はやく　まはりますか。
○りゃうはうの　はりが　十二を　さすと　ちょうど　十二じです。
○りゃうはうの　はりが　したに　くると　六じはんどろです。
○一じかんは　六十ぷんで、一にちは　二十四じかんです。
○一ぷんから　十ぷんまで　かぞへて　どらんなさい。
○いま　なんじですか。（時計の針の位置を色色にかへて板書しながら）
一時です。二時です。三時半です。九時　十五分です。

其の他

○いま　みじかい　はりは　三と　四の　あひだを　さして　ゐます。ながい　はりは　六を　さして　ゐます。なんじでせう。
○ながい　はりが　九を　さすと　なんじに　たりますか。
同樣の質問を多數に行ふ。

六

一　教　材

新出語　どこ　どこ　わけ　あさ　ゆふがた　ひ　ひがし　でて　にし　はいり　でる

あかるく　くらく　ひる　よる　ほし　そら
ひかり　つき　とき

讀替文字　ゆふ〔ユウ〕

語法　ひが　でると　あかるく　なります。

發音　イチニチワ　ニジユウヨジカンデス＝
イチジカラ　ニジユウヨジマデ　アリマス＝
マタ　イチニチオ　ゴセント　ゴゴニ　ワケマス＝
ドチラモ　ジユウニジカンズツデス＝
ゴゼンニモ　ロクジガ　アリマス＝
ゴゴニモ　ロクジガ　アリマス＝
ゴゼンノ　ロクジワ　アサデス＝
ゴゴノ　ロクジワ　ジユウハチジデ　ユウガタデス＝
ヒワ　ヒガシカラ　テテ　ニシニ　ハイリマス＝
ヒガ　デルト　アカルク　ナリマス＝
ヒガ　ハイルト　クラク　ナリマス＝
アサカラ　ユウガタマデガ　ヒルデス＝
ユウガタカラ　アサマデガ　ヨルデス＝
ヒルワ　アカルクテ　ヨルワ　クライノデス＝
ヨルワ　ホシガ　テマス＝
タクサンノ　ホシガ　ソラデ　ヒカリマス＝
マタ　ツキガ　デル　トキモ　アリマス＝

二　指導

指導の問題

時間より日に進み、午前、午後其の他、日に關係ある語彙の提示が主眼である。

二十四時間制のところでは、午前、午後の區別よりも十三時以後の數へ方が必要であるから、それを練習せしめることが必要であるが、さもない處では二十四時間制の部分は教へなくてもよい。

指導の方法

○一にちは　二十四じかんです。
○一じから　二十四じまで　あります。
○また　一にちを　ごぜんと　ごごに　わけます。
○どちらも　十二じかんづつです。
○ごぜんにも　六じが　あります。
○ごごにも　六じが　あります。
○ごごの　六じは　十八じです。
○ひは　ひがしから　でます。さうして　にしに　はいります。
○ひがしは　どちらですか。
○ひが　でると　あかるく　なります。
○ひが　はいると　くらく　なります。
○ひは　なんじごろ　でますか。
○ひは　なんじごろ　はいりますか。
○ひが　でる　ときは　あさです。
○ひが　はいる　ときは　ゆふがたです。
○あさから　ゆふがたまでが　ひるです。
○ゆふがたから　あさまでが　よるです。
○いまは　ひるですか、よるですか。
○ひるは　あかるくて、よるは　くらいのです。
○よるは　ほしが　でます。
○たくさんの　ほしが　そらで　ひかります。
○また　つきが　でる　ときも　あります。
○つきが　でると　あかるく　なります。

七

一　教材

新出語　さうして　みなみ　あちら　こちら　きた　おきて　やすみ　あさごはん　ひるごはん　ごろ　ゆふごはん　たいてい　まいばん

語法　ひは　ひがしから　です。
ゆふごはんは　なんじですか。
たいてい　六じごろです。

發音　ヒワ　ドチラカラ　デマスカ＝
ヒガシカラ　デマス＝
ソオシテ　ドチラニ　ハイリマスカ＝
ニシニ　ハイリマス＝
ミナミワ　ドチラデスカ＝
アチラデス＝
ソレデワ　コチラワ　ナント　イイマスカ＝
キタト　イイマス＝
イマワ　アサデス＝
ワタクシタチワ　アサ　オキテ　ヨル
ヤスミマス＝
アナタワ　アサ　ナンジニ　オキマスカ＝
ロクジ　ジップンマエニ　オキマス＝
アサゴハンワ　ナンジニ　タベマスカ＝
シチジニ　タベマス＝
ヒルゴハンワ　ナンジゴロ　タベマスカ＝
ジュウニジト　イチジノ　アイダニ
タベマス＝
ユウゴハンワ　ナンジデスカ＝
タイテエ　ロクジゴロデス＝
アナタワ　マイバン　ナンジニ　ヤスミマスカ＝
ジュウジハンゴロニ　ヤスミマス＝

二、指導

指導の問題

前課より引續き、日の問題から方角に及び、更に學習者の日常生活と連絡せしめて、起床、就寢、食事等の時間の問答に導き、學習者の個人的體驗に基づく生活指導をなし、學習の生活化を圖る。

八

一、教材

新出語　けふ　一えうび　すゐえうび　あした　もく＝
えうび　きんえうび　一しうかん　なのか
にちえうび　はじめ　どえうび　をはり
一ばんめ　げつえうび　くゎえうび　まんな＝
か　いきー　なぜ　やすみ　一だ　から　一だ＝
け　ほか

讀替文字　けふ（キヨオ）　えう（ヨオ）
しう（シユウ）

語法　はじめの　ひ　二ばんめの　ひ
をはりの　ひ
なぜ　いきませんか。
やすみだからです。

指導の方法
○ひは　どちらから　ですか。
○さうして　どちらに　はいりますか。
○みなみは　どちらですか。
○こちらは　なんと　いひますか。（北を指して）
○いまは　あさですか、ゆふがたですか。
○わたくしたちは　あさ　おきて、よる　やすみます。
○あなたは　あさ　なんじに　おきますか。
○あさごはんは　なんじに　たべますか。
○ひるごはんは　なんじごろ　たべますか。
○それでは　ゆふごはんは　なんじですか。
○あなたは　まいばん　なんじに　やすみますか。
○いまは　なんじですか。

其の他

備考　地方により一日三食でない所もあるから、臨機應變に問答をなすべきことは勿論である。

がくかうの　やすみは　にちえうびだけですか。

その　ほかにも　やすみが　あります。

キョオワ　ナニヨオビデスカ。

スイヨオビデス。

アシタワ　モクヨオビデスカ。キンヨオビデスカ。

モクヨオビデス。

イッシュウカンワ　イクニチデスカ。

ナノカデス。

ニチヨオビワ　イッシュウカンノ　ハジメノ　ヒデ。ドヨオビワ　オワリノ　ヒデス。

ニバンメノ　ヒワ　ケツヨオビデ　サンバンメノ　ヒワ　スヨオビデス。

イッシュウカンノ　マンナカノ　ヒワ　ナニヨオビデスカ。

スイヨオビデス。

ニチヨオビニモ　セエトワ　カツコオエイキマスカ。

イイエ。ニチヨオビニワ　イキマセン。

ナゼ　イキマセンカ。

ヤスミダカラデス。

カツコオノ　ヤスミワ　ニチヨオビダケデスカ。

イイエ。ソノ　ホカニモ　ヤスミガ　アリマス。

二　指　導

指導の問題

週の日の呼び方を習得せしめると共に、序數詞の呼び方、理由に關する問答の仕方等を學習せしめるのが主眼である。

指導の方法

○一しうかんは　いくにちですか。

○にちえうびは　一しうかんの　はじめの　ひです。

○どえうびは　をはりの　ひです。

○二ばんめの　ひは　なにえうびですか。

○三ばんめの　ひは　なにえうびですか。

○一しうかんの　まんなかの　ひは　なにえうびですか。

○けふは　なにえうびですか。

○それでは　あしたは　なにえうびですか。

○にちえうびにも　せいとは　がくかうへ　いきますか。

○なぜ　いきませんか。

○けふは　やすみですか。

○がくかうの　やすみは　にちえうびだけですか。

○あなたは　にちえうびにも　べんきやうしますか。

九

一　教　材

新出語　一かげつ　およそ　四しうかん　一ねん　しって　一ぐわつ　しうぐわつ　とんげつ　らいげつ　せんげつ

讀替文字　ぐわ〔ガ〕　しう〔ショオ〕

語　法　一かげつには　およそ　四しうかん　あります。

一ぐわつは　しうぐわつとも　いひます。

發　音　イッカゲツニワ　オヨソ　ヨンシュウカン　アリマス。

イチネンニワ　ジュウニカゲツ　アリマス。

アナタワ　ソノ　ナマエオ　シッテ　イマスカ。

ハイ　シッテ　イマス＝
イッテ　ゴランナサイ＝
イチガツ　ニガツ　サンガツ　シガツ　ゴガツ　ロクガツ　シチガツ　ハチガツ　クガツ　ジュウガツ　ジュウイチガツ　ジュウニガツデス＝
ソオデス＝
イチガツワ　ハジメノ　ツキデ　ショオガツトモ　イイマス＝
コンゲツワ　ナンガツデスカ＝
ハチガツデス＝
ライゲツワ　ナンガツデスカ＝
クガツデス＝
ソレデワ　センゲツワ　ナンガツデシタカ＝
シチガツデシタ＝

二　指導

指導の問題

本課に於ては月の呼び方及び數へ方「とんげつ」「らいげつ」「せんげつ」等月に關聯する語彙を習得せしめるのが主眼である。

指導の方法

○一かげつには　およそ　なんしうかん　ありますか。
○一ねんには　なんかげつ　ありますか。
○一しうかんには　いくにち　ありますか。
○あなたは　つきの　なまへを　しって　ゐますか。
○つきの　なまへを　いって　どらんなさい。
○一ぐわつから　十二ぐわつまで　じゅんに　いって　どらんなさい。
○一ぐわつは　はじめの　つきですか、をはりの　つきですか。

○一ぐわつは　また　なんと　いひますか。
○とんげつは　なんぐわつですか。
○らいげつは　なんぐわつですか。
○それでは　せんげつは　なんぐわつでしたか。
○三ぐわつは　なんばんめの　つきですか。
○一ねんの　をはりの　つきは　なんと　いひますか。
○二ばんめの　つきは　なんぐわつですか。

十

一　教材

新出語　まいげつ　どの　一じつ　ふつか　みっか　よっか　いつか　むいか　やうか　ここのか　とをか　十よっか　はつか　二十よっか

讀替文字　やう（ヨオ

發音法

三十一にちの　つきも　あります。

イッカゲツニワ　サンジュウニチ　アリマス＝
マイゲツ　サンジュウニチ　アリマスカ＝
イイエ　サンジュウイチニチノ　ツキモ　アリマス＝
ドノ　ツキニ　サンジュウイチニチ　アリマスカ＝
イチガツ　サンガツ　ゴガツ　シチガツ　ハチガツ　ジュウガツ　ジュウニガツニ　アリマス＝
ホカノ　ツキニワ　ミンナ　サンジュウニチ　アリマスカ＝
イイエ　ニガツニワ　ニジュウハチニチシカ　アリマセン＝
ツキノ　ハジメノ　ヒワ　ナント　イイマスカ＝

イチジツト　イイマス＝
イチジツカラ　サンジュウイチニチマデ
ジュンニ　イッテ　ゴランナサイ＝
イチジツ　フツカ　ミッカ　ヨッカ　イツカ
ムイカ　ナノカ　ヨオカ　ココノカ　トオカ
ジュウイチニチ　ジュウニニチ　ジュウサ＝
ンニチ　ジュウヨッカ　ジュウゴニチ　ジュ＝
ウロクニチ　ジュウシチニチ　ジュウハチ
ニチ　ジュウクニチ　ハツカ　ニジュウイチ＝
ニチ　ニジュウニニチ　ニジュウサンニチ
ニジュウヨッカ　ニジュウゴニチ　ニジュウ＝
ロクニチ　ニジュウシチニチ　ニジュウハ＝
チニチ　ニジュウクニチ　サンジュウニチ
サンジュウイチニチデス＝

二　指導

指導の問題

日の呼び方、月の大小其の他に關する問答により、月日に關する語彙及び月日に關聯する表現法に習熟せしめるのが本課の主眼である。

指導の方法

○一かげつには　およそ　三十にち　あります。
○まいげつ　三十にち　ありますか。
○どの　つきに　三十一にち　ありますか。
○ほかの　つきには　みんな　三十にち　ありますか。
○二ぐわつには　いくにち　ありますか。
○つきの　はじめの　ひは　なんと　いひますか。
○二ばんめの　ひは　なんと　いひますか。
○三ばんめの　ひは　みっかですか、よっかですか。
○よっかは　なんばんめの　ひですか。
○五ばんめの　ひは　なんと　いひますか。
○六ばんめの　ひは　むいかですか、なのかですか。

○なのかは　なんばんめの　ひですか。
○八ばんめの　ひは　なんと　いひますか。
○九ばんめの　ひと　十ばんめの　ひは　なんと　いひますか。
○十四ばんめの　ひは　なんと　いひますか。
○二十ばんめの　ひは　なんと　いひますか。

備考　七日は「なぬか」と呼ぶ地方もあるが「なのか」を採った。

十一

一　教材

新出語　らいしう　せんしう　ちゅう　さくばん　でかけ　こんばん　みゃうばん　おそく　かへり　けさ　はやく　おき　こんしう　いっしゃうけんめいに

讀替文字　ちゅう〔ジュウ〕　みゃう〔ミョオ〕　しゃう〔ショオ〕

語法　わたくしは　一日ぢゅう　うちに　ねました。
いっしゃうけんめいに　べんきゃうしました。

發音

キョオワ　ナンニチデスカ＝
ヨッカデス＝
ライシュウノ　ゲツヨオビワ　ナンニチデ＝
ショオ＝
ヨオカデス＝
アナタワ　センシュウノ　ドヨオビニ　ド＝
コエ　イキマシタカ＝
ドコエモ　イキマセンデシタ＝
ワタクシワ　イチニチジュウ　ウチニ　イ＝
マシタ＝
サクバンモ　ウチニ　イマシタカ＝

イイエ—デカケマシタ＝トモダチノ　ウチエ
イキマシタ＝
コンバンモ　デカケマスカ＝
コンバンワ　デカケマセンガ—アシタノ
アサ　ハヤク　デカケマス＝ソオシテ—ミヨ
オバン　オソク　カエリマス＝
アナタワ　ケサ　ハヤク　オキマシタカ＝
イイエ—オソク　オキマシタ＝
ナゼデスカ＝
サクバン　オソクマデ　ベンキョオシタカ＝
ラデス＝
アナタワ　コンシュウ　ヨク　ベンキョオ＝
シマシタカ＝
ハイ—イッショオケンメエニ　ベンキョオ＝
シマシタ＝

二　指導

指導の問題

前六課の應用練習を兼ね、時間、週、月、日等の呼稱に關する知識を整理し、今日、今週、今月等を中心としてその前後の週、月、日の呼び方等に習熟せしめるのを主眼とする。

指導の方法

○けふは　なんにちですか。
○けふは　なにえうびですか。
○らいしうの　げつえうびは　なんにちでせう。
○せんしうの　どえうびは　なんにちでしたか。
○あなたは　けふ　どこへ　いきましたか。
○きのふは　どこへ　いきましたか。
○さくばんは　うちに　ゐましたか、どこかへ　でかけましたか。
○にちえうびには　一にちぢゅう　うちに　ゐました

か。
○あなたは　ともだちの　うちへ　いきますか。
○あなたは　こんばん　でかけますか。
○あなたは　あさ　はやく　おきますか。
○あなたは　みゃうばん　うちに　ゐますか。
○あなたは　けさ　はやく　おきましたか。
○あなたは　さくばん　べんきゃうしましたか。
○あなたは　こんしう　よく　べんきゃうしましたか。
○あなたは　にっぽんごを　いっしゃうけんめいに　べんきゃうしますか。

十二

一　教材

新出語　まいあさ　おきる　すぐ　は　みがいて　あらひー　すこし　たって　くゃいしゃ　あ＝るいて　おそい　おひる　はたらいて　そ＝れから　ーど　しごと　じゅげふ　はじまり—をはり　ふくしふ　よしふ　げふ〔ギョオ〕

讀替文字

語法　おきると　すぐ　はを　みがいて　かほを　あらひます。
うちへ　かへってから　にっぽんごの　ふ＝くしふや　よしふを　します。

發音　ワタクシワ　マイアサ　ロクジニ　オキ＝マス＝
オキルト　スグ　ハオ　ミガイテ—カオオ
アライマス＝
ソレカラ　スコシ　タッテ—アサゴハンオ
タベマス＝
ハチジ　スコシ　マエニ　ウチオ　デテ—
カイシャエ　イキマス＝

タイテエ　アルイテ　イキマスガ　オソイ
トキニワ　クルマデ　イキマス＝
オヒルマデ　ハタライテ　ウチエ　カエリ＝
マス＝
ヒルゴハンオ　タベテ　ニジマデ　ヤスミ＝
マス＝
ソレカラ　モオ　イチド　カイシャデ　シゴ
トオ　シテ　ユウガタ　ウチエ　カエリマ＝
ス＝
ロクジゴロニ　ユウゴハンオ　タベテ　ガ＝
ツコオエ　イキマス＝
シチジカラ　ニッポンゴノ　ジュギョオガ
ハジマリマス＝
クジニ　ジュギョオガ　オワリマス＝
ウチエ　カエッテカラ　ニッポンゴノ　フ＝
クシュウヤ　ヨシュウオ　シマス＝

二　指導

指導の問題

學習者の一日の行動の表現法を習得せしめ、これに關聯ある語彙、語法を提示するのが主眼である。殊に時間的經過の順序による動作の言ひ表はし方は、その主なるものである。

指導の方法

○あなたは　まいあさ　なんじに　おきますか。
○おきると　すぐ　なにを　しますか。
○あなたは　まいあさ　はを　みがきますか。
○あなたは　なんで　かほを　あらひますか。
○あなたは　すぐに　あさごはんを　たべますか、すこし　たって　たべますか。
○あなたは　なんじごろ　○○へ　いきますか。
○たいてい　あるいて　いきますか、くるまで　いきますか。

○なんじまで　はたらきますか。
○なんじに　ひるごはんを　たべますか。
○なんじまで　やすみますか。
○それから　もう　一ど　でかけますか。
○なんじごろ　うちへ　かへりますか。
○なんじごろ　ゆふごはんを　たべますか。
○あなたは　なんじごろ　がくかうへ　きますか。
○なんじから　にっぽんごの　じゅげふが　はじまりますか。
○じゅげふは　なんじに　をはりますか。
○うちへ　かへってから　にっぽんごの　ふくしふをしますか。
○あなたは　にっぽんごの　よしふを　しますか。
○にっぽんごは　やさしいでせう。

十三

一　教材

新出語　をととひ　いつ　きのふ　きよねん　とし　をととし　せんせんげつ　せんせんしう　つぎ　あさって　さらいげつ　さらいねん　らいねん　さらいしう　ことし　なんねん

新出文字　昭和　年　きげん　あたり
　昭〔ショオ〕和〔ワ〕年〔ネン〕

讀替文字　のふ〔ノオ〕

語法　ことしは　きげん　なんねんに　あたりますか。

發音　オトトイト　ユウノワ　イツデスカ＝
　キノオノ　マエノ　ヒデス＝
　キョネンノ　マエノ　トシワ　ナント　イ＝

イマスカ＝
オトトシト　イイマス＝
センセンゲツト　ユウノワ　イツデスカ＝
センゲツノ　マエノ　ツキデス＝
ソレデワ　センシュウノ　マエワ　ナント
イイマスカ＝
センセンシュウト　イイマス＝
アシタノ　ツギノ　ヒワ　ナント　イイマ＝
スカ＝
アサッテト　イイマス＝
ライゲツノ　ツギノ　ツキワ　ナント　イ＝
イマスカ＝
サライゲツト　イイマス＝
サライネンノ　ユウノワ　イツデスカ＝
ライネンノ　ツギノ　トシデス＝
ライシュウノ　ツギワ　サライシュウデ
スカ＝
ソオデス＝
コトシワ　ナンネンデスカ＝
ショオワジュウハチネンデス＝
コトシワ　キゲン　ナンネンニ　アタリマ＝
スカ＝
ニセンロッピャクサンネンニ　アタリマス＝

二　指導

指導の問題

第十一課の延長として先々週、先々月、をととひ、をととし及びこれに對應する再來週、再來月、再來年、あさって等の語彙及び年月日に關する問答によりこれらの表はし方に習熟せしめるのが主眼である。

指導の方法

○けふは　なんにちですか。
○きのふは　なんにちでしたか。

○きのふの　まへの　ひは　なんと　いひますか。
○をととひは　なんにちでしたか。
○をととしと　いふのは　いつですか。
○それでは　せんしうの　まへは　なんと　いひますか。
○あしたの　つぎの　ひは　なんと　いひますか。
○らいげつの　つぎの　つきは　なんと　いひますか。
○さらいねんと　いふのは　いつですか。
○らいしうの　つぎは　さらいげつですか。
○あなたは　せんしう　がくかうへ　きましたか。
○なにを　べんきやうしましたか。
○あなたは　きのふも　がくかうへ　きましたか。
○あしたも　あさっても　きますか。
○ことしは　なんねんですか。
○らいねんは　なんねんですか。
○さらいねんは　なんねんですか。
○ことしは　きげん　なんねんに　あたりますか。
○きょねんは　なんねんでしたか。
○をととしは　なんねんでしたか。
○それでは　さらいねんは　なんねんに　あたりますか。

十四

一　教材

新出語　いい　てんき　かぜ　ほとんど　てって
くも　あつくて　からだ　あせ　すずしい
くもって　すっと　わるい　あめ　ひどく
ふって　つよく　ふきー　そのかはり

語法　かぜも　ほとんど　ありません。
ほとんど　くもが　ありません。
あめが　ひどく　ふって　かぜが　つよく

ふきました。

あつくて　からだぢゅうから　あせが　でます。

發音

キョオワ　イイ　テンキデス。

カゼモ　ホトンド　アリマセン。

ヒガ　ヨク　テツデイテ　ソラニワ　ホト＝ンド　クモガ　アリマセン。

アツクテ　カラダジュウカラ　アセガ　テ＝マス。

キノオワ　キョオヨリ　スズシイノデシタ。

ソラワ　クモツテ　イテ　ヒワ　デテ　イ＝マセンデシタ。

オトトイワ　キノオヨリ　ズツト　ワルイ　テンキデシタ。

アメガ　ヒドク　フツテ　カゼガ　ツヨク　ブキマシタ。

ソノカワリ　アツクワ　アリマセンデシタ。

二　指　導

指導の問題

天候の良否、暑さ、涼しさ、風雨等に關する言ひ表はし方を習得せしめると共に「ほとんど」「ずつと」の如き副詞、及び「ひどく」「つよく」の如き形容詞の副詞形などを學習せしめるのが主眼である。

なほ本課の如き教材は、それに丁度適合するやうな天候がないのを常とするから、問答は教材を離れ現實に即して行ふやうに心掛くべきである。

「そのかはり」は適當の場合を選んで、前以て使用し置くがよい。

指導の方法

○けふは　いい　てんきですか。

○かぜが　ありますか。

○ひが　よく　てつて　ゐますか。

○そらには　くもが　ありますか。

○けふは　あついのですか、すずしいのですか。

○あつい　ときには　からだぢゅうから　なにが　でますか。

○あせは　あつい　ときに　でますか、すずしい　ときに　でますか。

○くもつて　ゐる　ひには　ひは　でて　ゐますか。

○ここは　にっぽんより　ずっと　みなみですか、きたですか。

○にっぽんより　ずっと　あついのですか、すずしいのですか。

○ここでは　あめが　ふりますか、ほとんど　ふりませんか。

○あめが　ひどく　ふりますか。

○かぜは　つよく　ふきますか、ほとんど　ふきませんか。

○かぜが　ふく　ときは　あついのですか、すずしいのですか。

○ここでは　○○に　あめが　たくさん　ふります。

○そのかはり　あまり　あつくは　ありません。

十　五

一　教　材

新出語　とづつみ　だし　いうびんきよく　とほい　とほく　かなり　ちかい　かかり　ぐらゐ　じてんしゃ　はやい　きつて　かひ　きんじょ　みせ

讀替文字　いう〔ユウ〕　しゃ〔シヤ〕　じょ〔ジョ〕

語　法　こづつみを　だしに　いきました。

あるいて　十二三ぷんしか　かかりません。

くるまで　十五ふんぐらゐです。

じてんしゃなら　もつと　はやいでせう。

發音

ワタクシワ　キノオ　コズツミオ　ダシニ｜ユウビンキョクエ　イキマシタ＝
ユウビンキョクワ　アナタノ　ウチカラトオイノデスカ＝
イイエ｜アマリ　トオクワ　アリマセン＝
カナリ　チカイノデス＝
アルイテ　ジュウニサンプンシカ　カカリマセン＝
ガッコオエ　イクノニモ　オナジクライカカリマスカ＝
イイエ｜ガッコオエワ　モット　カカリマス＝
クルマデ　ジュウゴフングライ　カカリマス＝
デンシャナラ　モット　ハヤイデショオ＝
ハイ｜ジテンシャナラ　ジップングライデス＝
ハガキヤ　キッテオ　カイニモ　ユウビンキョクエ　イキマスカ＝
イイエ｜ソオ　ユウ　モノワ　タイテエキンジョノ　ミセデ　カイマス＝

二　指導

指導の問題

「だしに　いく」「かひに　いく」の如き往來に關する動詞と共に用ひて目的を示す「に」の用法、「あるいて」「くるまで」の如き往復の手段の表はし方、「なら」の用法等を習得せしめるのが主眼である。

指導の方法

○これは　こづつみです。（繪又は實物を示して）
○こづつみは　どこで　だしますか。
○いうびんきょくは　ここから　とほいのですか、ちかいのですか。

○あなたの　うちから　かなり　とほいのですか、あまり　とほくは　ありませんか。
○あるいて　どのくらゐ　かかりますか。
○あなたの　うちから　がくからまで　あるいて　どのくらゐ　かかりますか。
○あなたは　がくからへ　あるいて　きますか、くるまで　きますか。
○あなたは　じてんしゃを　もつて　ゐますか。
○じてんしゃと　くるまと　どちらが　はやいでせう。
○じてんしゃなら　がくからまで　どのくらゐ　かかりますか。
○いうびんきょくは　この　きんじょに　あります　か。
○あるいて　どのくらゐ　かかりますか。
○はがきや　きってを　かひにも　いうびんきょくへ　いきますか。
○さう　いふ　ものは　どこで　かひますか。
○この　きんじょに　みせが　たくさん　あります　か。

十六

一　教材

新出語　たい　てがみ　おもすぎ｜はって　かるい　おもい　｜グラム　おつり　つき｜

語法　この　こづつみを　だしたいのですが　いくら　かかりますか。
この　てがみは　五せんで　いいのですか。
おもすぎます。

發音　コノ　コズツミオ　ダシタイノデスガ｜イクラ　カカリマスカ＝
ジュウハッセン　カカリマス＝

コノ　テガミワ　ゴセンデ　イイノデスカ。
オモスギマスカラ　ジュウゴセン　カカリマス。
ゴセンノ　キッテオ　モオ　ニマイ　ハッテ　クダサイ。
テガミワ　カルイノナラ　ゴセンデ　イキマスガ、オモイノワ　モット　カカリマス。
イクラマデ　ゴセンデ　イキマスカ。
ニジュウグラムマデデス。
コノ　テガミワ　ヨンジュウゴグラム　アリマスカラ、ジュウゴセン　カカリマス。
ソレデワ　ニジッセン　アゲマス。
ゴセンノ　オツリデス。
イツゴロ　ツキマスカ。
イッシュウカングライデ　ツキマス。

二　指導

指導の問題

郵便局に於ける問答に基づき、これに關係ある語彙、語法を學習せしめるのが本課の主眼である。

なほ語法中には「……たい」「……すぎる」「……でいい」等があり、極めて重要なものであるから、これらの習熟にも十分留意する必要がある。

指導の方法

○こづつみが　だしたい　ときには　どこへ　いきますか。
○てがみが　だしたい　ときにも　いうびんきょくへ　いきますか。
○てがみは　いくせんで　いいのですか。
○はがきは　いくらで　いいのですか。
○てがみには　なにを　はりますか。
○いくらの　きってを　はりますか。

○おもすぎる　てがみには　もっと　きってを　はりますか。
○てがみは　かるいのなら　いくらで　いきますか。
○おもいのも　五せんで　いきますか。
○いくらまで　五せんで　いきますか。
○二十五グラムの　てがみは　いくら　かかりますか。
○四十五グラムなら　いくら　かかりますか。
○二十せん　あげると　いくらの　おつりですか。
○この　てがみは　○○まで　いくにち　かかりますか。
○いくにちぐらゐで　つきますか。

十七

一　教材

新出語

やまもと　あをやま　すんで　めうじ
なまへ　はるを　おくさん　あきこ　こども
をとこのこ　たらう　じらう　おとうと
あね　いもうと　おとうさん　おかあさん
おや　むすこ　むすめ　をんなのこ　きぬこ
うまれた　ばかり　あかんぼう　きゃうだい
あに　おぢいさん　おばあさん　まご
にいさん　ねえさん　より　たけを　みちこ
をぢさん　をばさん　きんいちらう　ゆきこ
ぎんじらう　ともさぶらう　いとこ　をひ
めひ　としより　かぞく　おなか　なくなり
けっこんして　ちかく　まち

讀替文字

めう〔ミョオ〕　らう〔ロオ〕　とう〔トオ〕

語法

をとこのこが　ふたりで、たらう、じらうといひます。
にいさんは　やまもとさんより　としが　ふたつ　うへで、いもうとさんは　みっつ

タロオサハロ　キスコサハト　ジロオサハノ
アリテ｜ジロオサハロ　タロオサハト　キ＝
スコサハノ　オトオトテス‖
キスコサハロ　ジロオサハノ　アキテ｜タ＝
ロオサハノ　イモオトテス‖
ヤマモトサハロ　コトモタチノ　オトオサ＝
ハテ｜アキコサハロ　オカアサハテス‖
ヤマモトサハト　オタサハロ　コトモタチノ
オサテス‖
タロオサハト　ジロオサハロ　ムスコテ｜
キスコサハロ　ムスメテス‖
ヤマモトサハノ　オトオサハト　オカアサ＝
ハロ　コトモタチノ　オジイサハト　オバア＝
サハテ｜コトモタチロ　アコテス‖

（二）

ヤマモトサハロ　サハニハキミオタイテス‖
ニイサハト　イモオトサハガ　ビトリスジ
アリテ｜ジロオサハロ　タロオサハト　キ＝
スコサハノ　オトオトテス‖
キスコサハロ　ジロオサハノ　アキテ｜タ＝
ロオサハノ　イモオトテス‖
ヤマモトサハロ　コトモタチノ　オトオサ＝
ハテ｜アキコサハロ　オカアサハテス‖
ヤマモトサハト　オタサハロ　コトモタチノ
オサテス‖
タロオサハト　ジロオサハロ　ムスコテ｜
キスコサハロ　ムスメテス‖
ヤマモトサハノ　オトオサハト　オカアサ＝
ハロ　コトモタチノ　オジイサハト　オバア＝
サハテ｜コトモタチロ　アコテス‖

（二）

ヤマモトサハロ　サハニハキミオタイテス‖
ニイサハト　イモオトサハガ　ビトリスジ
アリテス‖
キミサハモ　オトオトサハモ｜アリテセハ‖
ニイサハロ　ヤマモトサハミリ　トシガ
フタシ　ウエテ｜イモオトサハロ　ミシシ
シタテス‖
ニイサハロ　タカオト　イシテ｜イモオトサ
ハロ　ミチコト　イイテス‖
タカオサハロ　タロオサハタチノ　オジサハ
テ｜ミチコサハロ　オバサハテス‖
タカオサハロ　コトモガ　ミニハ　アリテ＝
スス‖
キハイチロオ｜コキコ｜キハシロオ｜トモ＝
サアロオト　イイテス‖
コノ　コトモタチロ　タロオタチノ　イト＝
コテス‖
キハイチロオサハ｜キハシロオサハ｜トモサ
アロオサハロ　ヤマモトサハノ　オイテ｜
コキコサハロ　メエテス‖
ヤマモトサハノ　オトオサハロ　コトシ
チシコウテスカラ｜カカリ　トシミリテス‖
タカオサハノ　カシタト　イシシミニ　イ＝
ナカニ　スハテ　イテス‖
タカオサハノ　オカアサハロ　オトシ　ナ
タカリテシタ‖
ミチコサハロ　モオ　ウシコハシテ｜チガク
ノ　ヤエニ　スハテ　イテス‖

三　指導

指導の問題

家族關係を表はす語彙を習得せしめると共に、それに關係ある名詞、年齢等の言ひ表はし方をも學習せしめるのが主眼である。

家族關係を示す圖表を作り、これに基づいて指導するのが有効である。

指導の方法

（一）

○やまもとさんは　あをやまに　すんで　ゐます。
○やまもとと　いふのは　めうじです。
○なまへは　はるをと　いひます。
○あなたの　めうじは　なんと　いひますか。
○やまもとさんの　おくさんは　なんと　いひますか。
○やまもとさんには　こどもが　いくにん　ありますか。
○をとこのこが　いくにん　ありますか。
○をんなのこは　いくにん　ありますか。
○たらうさんは　ことし　いくつですか。
○きぬこさんは　ことし　いくつですか。
○たらうさんと　きぬこさんは　としが　いくつ　ちがひますか。
○じらうさんは　おほきいのですか。
○いつ　うまれたばかりですか。
○たらうさんは　だれの　あにですか。
○じらうさんは　だれの　おとうとですか。
○きぬこさんは　だれの　あねですか。
○きぬこさんは　だれの　いもうとですか。
○やまもとさんは　こどもたちの　なんですか。
○あきこさんは　なんですか。
○だれが　こどもたちの　おやですか。
○たらうさんと　じらうさんは　やまもとさんたちの　なんですか。
○はなこさんは　なんですか。
○やまもとさんの　おとうさんは　こどもたちの　なんですか。
○やまもとさんの　おかあさんは　こどもたちの　なんですか。
○こどもたちは　やまもとさんの　おとうさんと　おかあさんの　なんですか。
○あなたは　きゃうだいが　ありますか。
○あなたは　おやが　ありますか。

其の他

（二）

○やまもとさんは　三にんきゃうだいです。にいさんと　いもうとさんが　ひとりづつ　あります。
○ねえさんや　おとうとさんが　ありますか。
○にいさんは　いくつ　としが　うへですか。
○いもうとさんは　いくつ　としが　したですか。
○にいさんは　なんと　いひますか。
○たけをさんは　たらうさんたちの　なんですか。
○みちこさんは　なんですか。
○たけをさんには　こどもが　いくにん　ありますか。
○たけをさんの　こどもたちは　たらうさんたちの　なんですか。
○きんいちらうさんは　やまもとさんの　なんですか。
○ゆきこさんは　なんですか。
○やまもとさんの　おとうさんは　ことし　いくつですか。
○七十の　ひとは　としよりですか。
○やまもとさんの　おとうさんは　だれと　いっしよに　すんで　ゐますか。
○どこに　すんで　ゐますか。
○たけをさんの　おかあさんも　いっしよに　ゐますか。
○みちこさんも　たけをさんと　いっしよに　すんで　ゐますか。
○なぜ　いっしよに　すんで　ゐませんか。
○みちこさんは　どこに　すんで　ゐますか。
○あなたには　をぢさんが　ありますか。
○をばさんも　ありますか。
○いとこが　たくさん　ありますか。

○あなたは　いくつですか。

十八

一　教材

新出語　ものおと　なければ　こと　あっても　とぢれば　しかし　あければ　すぐに　もし　もつ　にぎる　おす　はしる

語法　めが　なければ　みる　ことが　できません。

みみが　なければ　きく　ことが　できません。

めが　あっても　これを　とぢれば　なにも　みえません。

めを　あければ　すぐに　みえます。

もし　てが　なければ　ものを　もつ　ことが　できません。

發音　ワタクシタチワ　メデ　モノオ　ミマス＝

ミミデ　オトオ　キキマス＝

メガ　ナケレバ　ミル　コトガ　デキマセン＝

ミミガ　ナケレバ　キク　コトガ　デキマセン＝

メガ　アッテモ　コレオ　トジレバ　ナニモ　ミエマセン＝

シカシ　メオ　アケレバ　スグニ　ミエマス＝

ワタクシタチワ　テヤ　アシデ　イロイロノ　コトオ　シマス＝

モシ　テガ　ナケレバ　モノオ　モツ　コトガデキマセン＝

ジオ　カク　コトモ　デキマセン＝

ソノ　ホカ　ニギル　コトモ　ヒク　コトモ　オス　コトモ　デキマセン＝

モシ　アシガ　ナケレバ　アルク　コトガ　デキマセン＝

ハシル　コトモ　デキマセン＝

二　指導

指導の問題

「なければ」の如き形容詞の條件法、「とぢれば」「あければ」の如き動詞の條件法、及び「ことが　できる」といふ可能の形を習得せしめるのが本課の主眼である。

指導の方法

○わたくしたちは　なんで　ものを　みますか。

○みみで　なにを　ききますか。

○めが　なければ　なにを　する　ことが　できませんか。

○みみが　なければ　なにを　する　ことが　できませんか。

○めが　あれば　いつも　みえますか。

○めを　とぢれば　なにを　する　ことが　できませんか。

○どう　すれば　すぐに　みえますか。

○わたくしたちは　てや　あしで　なにを　しますか。

○もし　てが　なければ、なにを　する　ことが　できませんか。

○もし　あしが　なければ、なにを　する　ことが　できませんか。

○あしが　なければ、あるく　ことも　はしる　ことも　できませんか。

○なにが　なければ、にぎる　ことが　できませんか。

○あしが　なくても、じを　かく　ことが　できますか。

十九

一　教材

新出語　はたち　つとめて　いつも　げんき　びゃ‖
　　うき　たまに　おなか　いたい　ぢきに
　　なほり　まだ　はやびき　えいぐわ　すき‖
　　ですから　ときどき
讀替文字　びゃう（ビヨオ）
語法　たまには　あたまの　いたい　ことが　あ‖
　　ります。
　　まだ　くわいしゃを　やすんだ　ことは
　　ありません。
　　わたくしは　えいぐわが　すきです。
發音　ワタクシワ　コトシ　ハタチデ｜カイシャニ
　　ツトメテ　イマス‖

イツモ　ゲンキデ｜アマリ　ビョオキニ
ナリマセン‖
シカシ｜タマニワ　アタマヤ　オナカノ
イタイ　コトガ　アリマス‖
ケレドモ｜タイテエ　ジキニ　ナオリマス‖
カゼオ　ヒク　コトモ　アリマスガ｜
マダ　カイシャオ　ヤスンダ　コトワ
アリマセン‖
ハヤビキオ　シタ　コトモ　アリマセン‖
ワタクシワ　エイガガ　スキデス‖
デスカラ｜カイシャノ　ヤスミノ　ヒニ｜
トキドキ　エエガオ　ミニ　イキマス‖

二　指導

指導の問題

學習者の環境及び健康などに關する問答を中心として過去の經驗を示す「ことがある」を習得せしめ、「いつも『たまに』の如き時に關する副詞を學習せしめるのが主眼である。

指導の方法

○あなたは　ことし　いくつですか。
○あなたは　どこに　つとめて　ゐますか。
○あなたは　いつも　げんきですか。
○あまり　びゃうきに　なりませんね。
○びゃうきの　ひとは　いつも　げんきですか。
○あなたは　まいにち　がくかうへ　きますか、たまに　やすみますか。
○たまには　あたまの　いたい　ことが　ありますか。
○おなかの　いたい　ことも　ありますか。
○たいてい　ぢきに　なほりますか。
○かぜを　ひく　ことも　ありますか。
○あなたは　がくかうを　やすんだ　ことが　ありますか。
○はやびきを　した　ことが　ありますか。
○あなたは　まへに　にっぽんごを　ならった　ことが　ありますか。
○あなたは　えいぐわが　すきですか。
○ときどき　みに　いきますか。
○いつ　みに　いきますか。

二十

一　教材

新出語　くだもの　きらひ　だいすきです　バナナ
　　ドリヤン　ーなど　うって　くだものや
　　かふ　はらはなければ　なりません
　　そんなに　はらはなくても　やすい　やさい
　　ーから　やほや　パン　パンや　うし　ぶた

にく　にくや　さたう　しほ　さけ
いかなければ　しょくれうひんや

讀替文字　れう（リヨオ）

語　法　くだものを　かふ　ときには　おかねを
たくさん　はらはなければ　なりませんか。
そんなに　たくさん　はらはなくても
いいのです。
くだものは　やすい　ものですから。

發　音　アナタワ　クダモノワ　スキデスカ｜キラ＝
イデスカ＝
ダイスキデス＝
ドンナ　クダモノガ・スキデスカ＝
バナナ｜ドリヤン｜マンゴスチンナドガ
スキデス＝
ソレワ　ドコデ　ウツテ　イマスカ＝
クダモノヤデ　ウツテ　イマス＝
クダモノオ　カウ　トキニワ｜オカネオ
タクサン　ハラワナケレバ　ナリマセンカ＝
イイエ｜ソンナ　タクサン　ハラワナク＝
テモ　イイノデス＝クダモノワ　ヤスイ
モノデスカラ＝
ヤサイワ　ドコデ　ウツテ　イマスカ＝
ヤオヤデ　ウツテ　イマス＝
パンワ　パンヤデ｜ウシヤ　ブタノ　ニクワ
ニクヤデ　ウツテ　イマス＝
モシ　サトオヤ　シオヤ　サケオ　カイタイ
トキニワ｜ドンナ　ミセエ　イカナケレバ
ナリマセンカ＝
ショクリヨオヒンヤエ　イカナケレバ
ナリマセン＝

二　指　導

指導の問題

強制を示す「なければ　なりません」及びそれに對應する「なくてもいい」の構文と共に、日常生活品やその賣買に關する問答に用ひる語彙を習得せしめるのが主眼である。

指導の方法

○あなたは　くだものは　すきですか、きらひですか。
○どんな　くだものが　すきですか。
○ドリヤンと　マンゴスチンと　どちらが　すきですか。
○くだものは　どこで　うつて　ゐますか。
○くだものを　かふ　とき　おかねを　たくさん　はらはなければ　なりませんか。
○なぜですか。
○やさいは　どこで　うつて　ゐますか。
○うしや　ぶたの　にくは　どこで　うつて　ゐますか。
○もし　さたうが　かひたい　ときには、どこへ　いかなければ　なりませんか。
○さけが　かひたい　ときには、どんな　みせへ　いかなければ　なりませんか。
○しょくれうひんやでは　どんな　ものを　うつて　ゐますか。
○パンやでは　なにを　うつて　ゐますか。
○あなたは　まいにち　パンを　たべますか。
○くだものは　たかい　ものですか、やすい　ものですか。
○やほやでは　なにを　うりますか。

二十一

一　教　材

新出語　ぴん　ボタン　はさみ　から　いつぱい

マッチ　まるい　しかく　そく　いっそく
いっちゃう　ふるい　あたらしい　こしらへ
へー　かは　ガラス　てつ　たいへん　ひつ
えう

語法　くつは　たいてい　かはで　こしらへます。
てつは　たいへん　ひつえうな　かねです。

發音　コノ　エニワ　イロイロノ　モノガ　カイテ
アリマス。
ハコヤ　ビンヤ　ボタンヤ　ハサミヤ　ソノ
ホカ　イロイロ　アリマス。
ハコワ　ヨッツ　アッテ　ミッツワ　カラデ
スカ　ヒトツワ　イッパイデス。
イッパイナノワ　マッチノ　ハコデス。
マルイ　ハコモ　アリマスカ。
イイエ　ミンナ　シカクノバカリデス。
クツワ　イクソク　ハサミワ　イクチョオ
アリマスカ。

クツワ　イッソク　ハサミワ　イッチョオ
アリマス。
コノ　クツワ　フルイノデスカ。
イイエ　アタラシイノデス。
クツワ　ナンデ　コシラエマスカ。
タイテエ　カワデ　コシラエマス。
ビンワ　ナンデ　コシラエマスカ。
ガラスデ　コシラエマス。
ハサミワ　ナンデ　コシラエマスカ。
テツデ　コシラエマス。
テツワ　タイヘン　ヒツヨオナ　カネデス。

二　指導

指導の問題

日常卑近の詞藻を與へ「そく」「ちゃう」等の助數詞、材料を示す「で」等の用法を習得せしめるのが主眼である。

指導の方法

○この　ゑを　どらんなさい。
○この　ゑには　いろいろの　ものが　かいて　あります。
○はとや　びんや　ぼたんや　その　ほか　いろいろ　あります。
○はとは　いくつ　ありますか。
○みんな　からですか。
○いっぱいなのは　なんの　はとですか。
○まるい　はとも　ありますか。
○くつは　いくそく　ありますか。
○はさみは　いくちゃう　ありますか。
○この　くつは　ふるいのですか。
○くつは　なんで　こしらへますか。
○びんは　なんで　こしらへますか。
○ふうとうは　なんで　こしらへますか。
○さつは　なんで　こしらへますか。
○てつで　なにを　こしらへますか。
○てつは　たいへん　ひつえうな　かねですか。

二十二

一　教材

新出語　ちひさく　ねぼきく　はば　ひろい　せまく
ページ　ポケット　いれる　もつて　べんり
ふべん　つかひーしる　たびたび　まいにち

語法　はばが　ひろい。(せまい)
ちひさい　じびきなら　ポケットの　なかへ
いれる　ことが　できます。
ちひさい　じびきは　もつて　あるくのに
べんりです。
ことばの　いみを　しるのに　つかひます。

發音

コノ　エオ　ゴランナサイ＝ホンガ　ヨンサツ　アリマス＝
ヒダリノ　ウエノ　ホンワ　チイサクテ　ウスイノデスガ　ソノ　シタノワ　オオキクテ　アツイノデス＝
ミギノ　ウエノ　ホンワ　ハバガ　ヒロイケレドモ　アツクワ　アリマセン＝
ミギノ　シタノワ　ハバガ　セマクテ　ウスイノデス＝
ジビキワ　タイテエ　アツクテ　ペエジガ　タクサン　アリマス＝
シカシ　ウスイノモ　アリマス＝
チイサイ　ジビキナラ　ポケットノ　ナカエイレル　コトガ　デキマス＝
オオキイノワ　イレル　コトガ　デキマセン＝
チイサイ　ジビキワ　モッテ　アルクノニ　ペンリデスガ　オオキイノワ　フベンデス＝
アナタワ　ジビキオ　モッテ　イマスカ＝
ハイ　ニサツ　モッテ　イマス＝
ジビキワ　ナンニ　ツカイマスカ＝
コトバノ　イミオ　シルノニ　ツカイマス＝
アナタワ　タビタビ　ジビキオ　ツカイマスカ＝
ハイ　ホトンド　マイニチ　ツカイマス＝

二　指導

指導の問題

所謂總主を持つ文を習得せしめると共に「もつてあるくのに　べんり」「しるのに　つかふ」などに於ける「に」の用法に習熟せしめるのが主眼である。

形容詞を二つ重ねて用ひる際の形は既に第一課に於て習得してゐるから、復習となるわけである。

指導の方法

○この　ふを　ごらんなさい。ほんが　いくさつ　ありますか。
○ひだりの　うへの　ほんは　どんなのですか。
○その　しなのは　どんなのですか。
○みぎの　うへの　ほんは　はばは　ひろいのですか、せまいのですか。
○その　ほんは　あついのですか。
○みぎの　したのは　どんなですか。
○この　ほんは　じびきでせうか。
○じびきは　たいてい　あついのですか、うすいのですか。
○あつい　ほんには　ページが　たくさん　ありますか。
○じびきは　みんな　あついのですか。
○じびきは　ポケットの　なかへ　いれる　ことが　できますか。
○ちひさいのなら　ポケットの　なかへ　いれる　ことが　できますか。
○おほきいのは　どうですか。
○ちひさい　じびきは　もつて　あるくのに　べんりですか、ふべんですか。
○あなたは　じびきを　もつて　ゐますか。
○いくさつ　もつて　ゐますか。
○じびきは　なにに　つかひますか。
○じびきを　みれば　なにが　わかりますか。
○あなたは　たびたび　じびきを　つかひますか。

二十三

一　教材

新出語　どのくらゐ　じゃうずに　はなせー　よめー

あまり　まちがひ　おもひ　ことば　お＝
ぼえる　たぶん　ない　しれ

讀替文字　じゃう（ジョオ）

語　法　かなり　じゃうずに　はなせます。
まいにち　さう　する　ことは　できない＝
かも　しれません。

發　音　アナタワ　モオ　ニッポンゴオ　ドノクライ
ベンキョオシマシタカ＝
モオ　ニカゲツ　ベンキョオシマシタ＝
カナリ　ジョオズニ　ハナセマスカ＝
イイエ　マダデス＝ヨタワ
ハナセマセン＝
ニッポンゴノ　ホンガ
ジョオズニ　ヨメマスカ＝
イイエ　アマリ　ジョオズニ　ヨメマセン＝
タビタビ　マチガイマス＝
ニッポンゴワ　ムズカシイト　オモイマス＝
イイエ　ソンナニ　ムズカシイトワ　オモ＝
イマセン＝カナリ　ヤサシイト　オモイマス＝
イチニチニ　コトバオ　サンジュウグライ
オボエル　コトガ　デキマスカ＝
タブン　デキルデショオ＝シカシ　マイニチ
ソオ　スル　コトワ　デキナイカモ　シレ＝
マセン＝
ワタクシワ　マイニチ　ニジカンシカ
ベンキョオデキマセンカラ＝

二　指　導

指導の問題

四段活用の動詞のみに存する可能の形、及び「…とおもふ」による引用の構文に習熟せしめるのが本課の主眼である。この可能の形は、四段活用の動詞から來た動詞とされてゐるが、初學者の場合には斯樣な説明

をするには及ばない。ただその可能の意味の加はつた語であることに留意せしめればよい。

指導の方法

○あなたは　もう　にっぽんごを　どのくらゐ　べんきょうしましたか。
○かなり　じゃうずに　はなせますか。
○にっぽんごの　ほんが　じゃうずに　よめますか。
○たびたび　まちがひますか。
○かたかなは　みんな　よめますか。
○ひらがなも　みんな　よめるでせう。
○にっぽんごは　むづかしいと　おもひますか。
○かなり　やさしいと　おもひますか。
○一にちに　ことばを　いくつぐらゐ　おぼえる　ことが　できますか。
○一にちに　三十ぐらゐ　おぼえる　ことが　できるでせう。

二十四

一　教　材

新出語　かきふり　しけん　しまって　よう　いけ＝
ません　わすれて　わすれもの　かして　あ＝
げ　たなか　かり　よろしう　おもらひ
きむら　さがして　わすれずに　き
つけて　おきき　かか　きいて
おいで　なほして　あと

讀替文字　よう（ヨオ）

語　法　かして　あげます。
えんぴつで　かいても　よう　どざいます
か。
わすれものを　しては　いけません。

發

よく　きを　つけて　おききなさい。

コレカラ　カキトリノ　シケンオ　シマス＝
ホンオ　シマッテ　クダサイ＝
エンピツデ　カイテモ　ヨオ　ゴザイマス＝
カ＝
イイエ　エンピツデ　カイテワ　イケマセ＝
ン＝
ペンデ　オカキナサイ＝
センセエ　ワタクシワ　ペンオ　ワスレテ
キマシタ＝
ワスレモノオ　シテワ　イケマセン＝
ソレデワ　キヨオワ　ワタクシノ
マンネンヒツオ　カシテ　アゲマショオ
アリガトオ　ゴザイマスガ　タナカサンニ
カリマスカラ　ヨロシュウ　ゴザイマス＝
ソオデスカ＝ソレデワ　カシテ　オモライ＝
ナサイ＝

キムラサン　アナタワ　ナニオ　シテ
イマスカ＝
カミオ　サガシテ　イマス＝
カミワ　ワタクシガ　アゲマス＝
カミニ　ナマエオ　ワスレズニ　カイテ
クダサイ＝
ワタクシガ　サンド　ヨミマスカラ　ヨク
キオ　ツケテ　オキキナサイ＝
ハジメワ　カカナイテ　ヨク　キイテ
オイデナサイ＝
ニドメニ　オカキナサイ＝サンドメニ　ナオ＝
シテ　ゴフン　アトデ　オダシナサイ＝

二　指　導

指導の問題

「……ても　よう　ございますか」の如き許可を乞ふ場合と、これに許可を與へる時、及び禁止の時の言

ひ方、形容詞の「ございます」に連る時の音便變化、助動詞的用法たる「……て　あげます」「……て　もらひます」の用法等を習得せしめるのが主眼である。

指導の方法

○これから　かきとりの　しけんを　します。
○ほんを　しまって　ください。
○□さん、あなたは　なにを　しましたか。
○かみを　だして　ください。
○その　かみに　ペンで　おかきなさい。
○えんぴつで　かいては　いけません。
○みんな　ペンが　ありますか。
○だれか　ペンを　わすれて　きましたか。
○わすれものを　しては　いけません。
○みんな　かみが　ありますか。
○だれか　かみを　さがして　ゐますか。
○それでは　あなたの　かみは　わたくしが　あげます。
○かみに　なまへを　わすれずに　かいて　ください。
○わたくしが　三ど　よみますから　よく　きを　つけて　おききなさい。
○はじめは　かかないで　よく　きいて　おいでなさい。
○二どめに　おかきなさい。
○三どめに　なほして　五ふん　あとで　おだしなさい。
○わからない　じが　ありますか。
○わからない　じは　かかないで　よろしう　ございます。
○となりの　ひとに　をしへて　もらっては　いけません。

二十五

一　教　材

新出語　やうす　のべ　おはなし　おつかひ　しつ〃もん　なさい　こたへ　やう　おっしゃいたとへば　おっしゃる　ひとりで　しみんなで　ならひ　おもしろいいつも　にっぽんごで　おはなしになります。いろいろの　ことを　するやうにおっしゃいます。ひとりで　よむ　ことも　ありますしみんなで　いっしょに　よむ　ことも　あります。

語　法

ノ　ヨオスオ　ノベマス〃
センセエワ　イツモ　ニッポンゴデ　オハナシニ　ナリマス〃
ニッポンゴノ　ホカワ　ホトンド　オツカ〃イニ　ナリマセン〃
センセエワ　ニッポンゴデ　シツモンナサ〃イマス〃
ワタクシタチワ　ソレニ　コタエマス〃
マタ　イロイロノ　コトオ　スル　ヨオニオッシャイマス〃
タトエバ　センセエガ　タツ　ヨオニ　オ〃ツシャルト　ワタクシタチワ　タチマス〃
ホンオ　ヨムヨオニ　オツシャルト　ホン〃オ　ヨミマス〃
ヒトリデ　ヨム　コトモ　アリマスシ　ミ〃ンナデ　イッショニ　ヨム　コトモ　アリ〃マス〃

発音

ワタクシタチノ　ニッポンゴノ　ジュギョオ

ソノホカ　イロイロノ　コトオ　シテナライマス〃
ニッポンゴノ　ジュギョオワ　タイヘンオモシロイト　オモイマス〃

二　指　導

指導の問題

日本語に於ける敬語の重要なことは申すまでもないが、前課までは學習上の段階として長上に對する敬語に於ても嚴密なる使用を强ひず、上下の差別による語法上の相違も最小限に留めた。しかしながらそれは長く放置すべきではないので、本課からその區別を明かにし正しい言葉遣を習得せしめるのである。

本課に於ては敬語法中「……に　なります」其の他により、目上の者の行動を叙述する場合の言葉遣を習得せしめると共に、「……やうに　いふ(おっしゃる)」といふ構文に習熟せしめるのが主眼である。

指導の方法

○けふは　わたくしたちの　にっぽんごの　じゅげふの　やうすを　のべませう。
○わたくしは　いつも　にっぽんごで　はなします。
○わたくしは　にっぽんごの　ほかは　ほとんど　つかひません。
○わたくしは　いつも　にっぽんごで　しつもんします。
○あなたがたは　それに　にっぽんごで　こたへます。
○わたくしは　いろいろの　ことを　するやうに　いひます。
○たとへば　わたくしが　たつやうに　いふと、あなたがたは　たちます。
○これは「わたくしが　おたちなさいと　いふと　あなたがたは　たちます。」と　おなじです。

○わたくしが　ほんを　だすやうに　いふと、あなたがたは　ほんを　だします。

○わたくしが　ほんを　よむやうに　いふと、あなたがたは　ほんを　よみます。

○あなたがたは　ひとりで　よむ　ことも　あります　し、みんなで　いっしょに　よむ　ことも　あります。

○あなたがたは　その　ほか　いろいろの　ことを　して　ならひます。

○にっぽんどの　じゅげふは　たいへん　おもしろい　と　おもひますか。

○にっぽんどには「けいど」と　いふ　ものが　あります。

○うへの　ひとに　つかふ　ことばと、ともだちや　したの　ひとに　つかふ　ことばは、すこし　ちがひます。

○せんせいは　うへの　ひとです。

○ですから　けいどを　つかはなければ　なりません。

○たとへば　せんせいが　はなす　ときには、あなたがたは「はなします」と　いっては　いけません。「おはなしに　なります」と　いはなければ　なりません。

○［はなし］と板書しその上下に［お］［はなし］へになります と書き動詞の第二形を丁寧にいふときの構文を悟らしめる。

○また「せんせいが　いひます」と　いっては　いけません。「せんせいが　おっしゃいます。」と　いはなければ　なりません。

○では　せいとの　ことばで　にっぽんどの　じゅげふの　やうすを　のべませう。

○せんせいは　いつも　にっぽんどで　おはなしに　なります。

○せんせいは　にっぽんどの　ほかは　ほとんど　おつかひに　なりません。

○せんせいは　いつも　にっぽんどで　しつもんを　なさいます。

○わたくしたちは　それに　にっぽんどで　こたへます。

○せんせいは　いろいろの　ことを　するやうに　おっしゃいます。

○たとへば　せんせいが　たつやうに　おっしゃると　わたくしたちは　たちます。

○せんせいが　ほんを　だすやうに　おっしゃると、わたくしたちは　ほんを　だします。

○せんせいが　ほんを　よむやうに　おっしゃると、わたくしたちは　ほんを　よみます。

其の他

○わたくしは　いつも　なにどで　はなしますか。

○わたくしは　にっぽんどの　ほかの　ことばを　つかひますか。

○わたくしは、なにどで　しつもんしますか。

○あなたがたは　なにどで　こたへますか。

○わたくしが　たつやうに　いふと、あなたがたは　どう　しますか。

○ほんを　よむやうに　いふと、あなたがたは　どう　しますか。

○いつも　ひとりで　よみますか。

○にっぽんどの　じゅげふは　おもしろいと　おもひますか。

二十六

一教材

新出語　ならふ　はんたい　あがる　さがる　うち＝　けし　かたち　いかー　きー　とー　うけみ　みなさん　ほめられー　ほめる　よぶ　よば

れる　しかる　たのむ
いかない。こない　しない　ほめられる
よばれる

語法

發音

ニッポンゴオ　ナラウ　トキ　ハンタイノ
コトバオ　イッショニ　オボエルト「タイ」
ヘン　ベンリデス。「タトエバ　アタラシイ
ト　フルイ」　アガル　ト　サガル　ナドワ
ハンタイノ　コトバデス。
マタ「ウチケシノ　カタチオ　イッショニ
オボエルト　ベンリデス。
タトエバ　イキマス　ノ　ウチケシワ「イ」
キマセン　マタワ　イカナイ　デ「キマス」ノ
ウチケシワ　キマセン　マタワ　コナイ
デス。
マタ「ウケミト　ユウ　カタチオ　オボエ」
ナケレバ　ナリマセン。
ミナサンガ　ヨオスニ　ニッポンゴオ
ハナスト「センセエニ　ホメラレマスネ。
コノ　ホメラレル　ハ　ホメル　ノ　ウケ」
ミデス。
ヨブ　ノ　ウケミワ　ヨバレル　デス。
シカル　ト　タノム　ノ　ウケミオ
イッテ　ゴランナサイ。

二　指導

指導の問題

反對語及びその提示の方法、打消、受身等簡單にて而も實用上便利な術語、並にその形式を與へて教室作業を便にすると共に、これらの文法的事實を意識的に學習せしめるのが主眼である。

指導の方法

○にっぽんごを　ならふ　とき、はんたいの　ことばを　いっしょに　おぼえると、たいへん　べんりです。

○たとへば「ふるい」の　はんたいは「あたらしい」です。
○「あがる」の　はんたいは「さがる」です。
○「おぼきい」の　はんたいは　なんですか。
○「うへ」の　はんたいは　なんですか。

其の他

○また「うちけし」の　かたちを　いっしょに　おぼえると　べんりです。
○たとへば「いきます」の　うちけしは「いきません」です。
○また「いかない」とも　いひます。
○「いきません」と「いかない」は　おなじ　いみです。
○「いかない」より「いきません」の　はうが　ていねいです。
○「きます」の　うちけしは「きません」または「とない」です。
○「します」の　うちけしは「しません」または「しない」です。
○「いきません」の　うちけしは　なんですか。
○「たべます」の　うちけしは　なんと　いひますか。

其の他

○また「うげみ」と　いふ　かたちが　あります。
○みなさんが　じゃうずに　にっぽんごを　はなすと　わたくしが「よく　できました。」と　いひます。
○それは　わたくしが　ほめるのです。
○わたくしが　みなさんを　ほめます。
○みなさんは　わたくしに　ほめられます。
○「ほめられます」は「ほめます」の　うけみです。
○「よぶ」の　うけみは「よばれる」です。
○みなさんが　わるい　ことを　すると　わたくしが「いけません」と　いって　しかります。
○みなさんは　わたくしに　しかられます。

○「しかる」の　うけみは「しかられる」です。
同樣にして五十音圖により四段、一段の動詞につき受身の構成法を説明する。
○「たべる」の　うけみは　なんですか。
○「みる」の　うけみを　いって　ください。

二十七

一　教　材

新出語　なんど　きかせー　つかはない　ださせて　よませー　よませる　かかせる　こたへさせー　させて　おぼえさせー　かうして　だんだん

語　法　はなして　きかせます。
ほんを　つかはないで　はなしだけを　します。

發　音　ニッポンゴノ　ジュギョオノ　トキ｜セン＝

セエワ　イロイロノ　コトオ　ナンドモ
ハナシテ　キカセマス＝
ハジメワ　ホンオ　ツカワナイデ｜ハナシ＝
ダケオ　シマス＝
シバラク　ハナシオ　シテカラ｜ホンオ
ダサセテ　ヨマセマス＝
ヒトリ｜ツ　ヨマセル　コトモ　アリマス＝
カカセル　コトモ　アリマス＝
マタ｜イロイロノ　シツモンニ
コタエサセマス＝
ソノ　ホカ　イロイロノ　コトオ　サセテ｜
コトバオ　オボエサセマス＝
コオシテ｜セエトワ　ダンダン　ジョオズニ
ナルノデス＝

二　指　導

指導の問題

使役の作り方及びその用法を習得せしめるのが本課の主眼である。
この使役の形は目下の者に何かさせるときの言ひ方であるから、教師の側より學習者に對する使役の形の練習は比較的簡單であるが、學習者に言はせる時にはとかく不自然になるから、その點をよく注意して指導することが肝要である。

指導の方法

○にっぽんごの　じゅげふの　とき、わたくしは　いろいろの　ことを　なんども　はなします。
みなさんは　それを　ききます。
○わたくしは　みなさんに　はなして　きかせます。
○「きかせます」は「しえき」の　かたちと　いひます。
○「しえき」の　かたちは　したの　ひとにだけ　つかひます。
○はじめは　ほんを　つかはないで　はなしだけをします。
○しばらく　はなしを　してから　ほんを　ださせます。
○「ださせます」は「だします」の　しえきです。
○それから　ほんを　よませます。
○「よませます」は「よみます」の　しえきです。
○ひとりづつ　よませる　ことも　あります。
○いっしょに　よませる　ことも　あります。
○また　かかせる　ことも　あります。
○また　いろいろの　しつもんに　こたへさせます。
○その　ほか　いろいろの　ことを　させて　ことばを　おぼえさせます。
○かうして　あなたがたは　だんだん　じゃうずになるのです。
其の他
學習者にこの形を使はせるときには、學習者より目

下の者の場合を考へて發問する。たとへば

○あなたの　うちには　めしつかひが　ゐますか。

○あなたは　じぶんで　きものを　あらひますか、めしつかひに　あらはせますか。

○ごはんは　じぶんで　こしらへますか、ほかの　ひとに　こしらへさせますか。

二十八

一　教　材

新出語　でんしゃ　のり一　こんで　なかなか　こしかけられ一　でした　しばらく　つりかはつかまって　やっと　こしかける　しゃしゃうきっぷ　きり一　くわいすうけん　おきのどくさま　それでは　わうふく　ちゃうめこたへる　くれ一　わたして　おり一

讀替文字　わう（オオ）

語　法　こしかけられませんでした。

「くわいすうけんを　ください。」と　いひ（きき）ました。

發　音　ワタクシワ　ケサ　デンシャニ　ノリマシタ＝

ズイブン　コンデ　イテ　ナカナカ　コシカケラレマセンデシタ＝シバラク　ツリカワニツカマッテ　イルト　マエニ　イタ　ヒトガタチマシタノデ　ヤット　コシカケル　コトガ　デキマシタ＝

ソノ　トキ　シャショオガ　キップオ　キリニ　キマシタノデ　ゴエンサツオ　ダシテ　カイスウケンオ　クダサイ　ト　イイマシタ＝

シャショオワ　カバン　ナカオ　ミテ　オキノドクサマデスガ　オツリガ

アリマセン　ト　コタエマシタ＝

ワタクシワ　ソレデワ　オオフクオ　クダサイ＝

ト　イッテ　ニジッセン　ダシマシタ＝

シャショオワ　ドチラデスカ＝ト　キキマシタ＝

アオヤマ　サンチョオメデス＝ト　ワタクシガ　コタエルト　シャショオワ　キップ　キッテ　オツリト　イッショニクレマシタ＝

アオヤマ　サンチョオメデ　ワタクシワ　キップオ　ワタクシ　デンシャオ　オリマシタ＝

二　指　導

指導の問題

「られる」といふ可能の助動詞の用法、及び引用文の後につく「と」の用法に習熟せしめるのが主眼である。可能の助動詞は受身のものと同形であるから、この點につき十分なる説明を加へる必要がある。

指導の方法

○この　きんじょに　でんしゃが　ありますか。

○でんしゃに　のる　ときには　なにを　かはなければ　なりませんか。

○でんしゃは　ときどき　いっぱいです。

○その　ときは　こんで　ゐます。

○えいぐわくわんは　ときどき　こんで　ゐます。

○その　はんたいは「すいて　ゐます。」です。

○でんしゃは　ときどき　すゐぶん　こんで　ゐます。

○その　ときには　なかなか　こしかけられません。

○「こしかけられません。」は「こしかける　ことができません。」と　おなじ　いみです。

○でんしゃの　なかには　つりかはが　あります。
○としかけない　ひとは　たいてい　つりかはに　つかまって　ゐます。
○もし　としかけて　ゐる　ひとが　たちますと、としかける　ことが　できます。
○とくばんの　うへは　なかなか　たかいのです。
○わたくしは　やっと　とどきます。
○でんしゃの　なかには　しゃしゃうが　ゐます。
○しゃしゃうが　きっぷを　きります。
○でんしゃの　きっぷは　一まいづつ　うります。
○ときどき　たくさんの　きっぷを　いっしょに　うります。
○それを　くわいすうけんと　いひます。
○しゃしゃうは　たいてい　かばんを　もって　ゐます。
○しゃしゃうの　かばんの　なかには　おかねや　きっぷが　はいって　ゐます。

○でんしゃの　きっぷは　一まい　いくらですか。
○もし　五十せん　あげれば　いくらの　おつりですか。
○しゃしゃうは　きっぷを　かふ　ひとに　ときどき　おつりを　だします。
○それですから　ときどき　おつりが　なくなります。
○その　ときには「おきのどくさまですが、おつりが　ありません。」と　こたへます。
○わたくしどもは　ときどき　きっぷを　二まい　かひます。いく　ときの　きっぷと　かへる　ときの　きっぷです。これを　わうふくきっぷと　いひます。
○わうふくきっぷは　ときどき　わうふくと　いひます。
○しゃしゃうは　きっぷを　きります。
○その　とき　「どちらですか。」と　いひます。
○わたくしどもは　いきたい　ところの　なまへを　いひます。
○たとへば　あをやま　三ちゃうめと　いひます。
○しゃしゃうは　おりる　ところを　をしへます。
○おりる　ところで　きっぷを　わたして　でんしゃを　おります。

其の他

○でんしゃは　いつも　こんで　ゐますか。
○こんで　ゐる　でんしゃでは　すぐ　としかけられますか。
○その　ときには　なにに　つかまって　ゐますか。
○しゃしゃうは　なにを　しに　きますか。
○くわいすうけんは　べんりですか、ふべんですか。
○たいてい　やすいのですか、たかいのですか。
○わうふくは　たいてい　おかねが　二ばいですか。
○しゃしゃうは　きっぷを　きる　とき　なんと　きますか。
○でんしゃを　おりる　とき　きっぷは　どう　しますか。

二十九

一　教　材

新出語　ようじ　ある　たづね　キロ　はなれた　バス　いった　ーよう　むかふ　えき　おりて　じゅんさ　ていしゃば　いかれ　ーいかうひじゃうに　だった　るす　ーさう　がっかりし　でんぱう　しらせて　よかった　しかた　かへって　しれない　またきやくま　でよう　もどって　ずませ

讀替文字　ぱう〔求才〕

語　法　きしゃか　バスで　いかなければ　なりません。

三十ぷんほど　まへに　でかけたのださう‖
です。
きしゃで　いく　ことに　しました。
しらせて　おけば　よかった。
すこし　まちうと　おもひました。
どちらに　しようかと　おもひました。
いへを　でようと　すると　かへって　き‖
ました。

發音

ワタクシワ　ヨオジガ　アッテ　キノオ
アル　ヒトオ　タズネマシタ‖
ソノ　ヒトワ　ニキロバカリ　ハナレタ
マチニ　スンデ　イルノデ　キシヤカ
バスデ　イカナケレバ　ナリマセン‖
ワタクシワ　マダ　ソノ　ヒトノ　ウチエ
イッタ　コトガ　ナカッタノデ　ドチラデ
イクノガ　ベンリナノカ　ワカリマセンデ‖
シタ‖
ソレデ　ドチラニ　ショオカト　オモイマ‖
シタガ　キシヤデ　イク　コトニ　シマシタ‖
ムコオノ　エキデ　オリテ　ジュンサニ　キ
クト　ソノ　ヒトノ　トコロ　スグ　ワカ
リマシタ‖
テエシヤバカラ　アルイテ　ジュウゴフン‖
グライノ　トコロデ　バスデモ　イカレマ‖
シタ‖
ワタクシワ　バスデ　イコオカトモ　オモイ
マシタガ　ヒジョオニ　イイ　テンキダッ‖
タノデ　アルイテ　イク　コトニ　シマシタ‖
ソノ　ヒトワ　ルスデシタ‖サンジップン‖
ホド　マエニ　デカケタノダソオデス‖
ワタクシワ　ガツカリシマシタ‖デンボオデ
マエニ　シラセテ　オケバ　ヨカッタト
オモイマシタガ　シカタガ　アリマセン‖
シカシ　サンシジップンデ　カエッテ

クルカモ　シレナイト　ユウノデ　スコシ
マトオト　オモイマシタ‖
ワタクシワ　キヤクマデ　イチジカン
チカク　マチマシタガ　カエッテ　コナイノデ
ウチエ　カエル　コトニ　シマシタ‖
ソノ　イエオ　デヨオト　シタ　トキ　チヨ‖
オド　ソノ　ヒトガ　カエッテ　キマシタ‖
ワタクシワ　マタ　キヤクマエ　モドッテ
ヨオジオ　スマセテ　ウチエ
カエリマシタ‖

二　指　導

指導の問題

敬體文中に用ひられた口語常體の各種の形式を習得せしめるのが主眼である。

日本文では口語敬體に於いても文中に於ける部分は常體を用ひるのが普通である。故に最初は全部敬體にしたものを示し、その中、敬體を用ひた部分を常體に直して指導する。

本課は第一人稱の叙述であるが、問答では第三者の話として取扱ふ方が好都合である。

指導の方法

○これは　やまもとさんの　はなしです。
○やまもとさんは　ようじが　ありまして、きのふ
ある　ひとを　たづねました。
○「ようじが　ありまして」は　ふつう「ようじが
あって」と　いひます。
○その　ひとは　二キロばかり　はなれた　まちに
すんで　ゐるので、きしゃか　でんしゃで　いかな
ければ　なりません。
○「はなれた　まち」は「はなれました　まち」と
おなじ　いみです。
○「すんで　ゐるので」は「すんで　ゐますので」と

○しかし　かこちらに　ささ　てんきだつたので　あるように　ふへ　ここに　しました。

○「ささ　てんきだつた」は「ささ　てんきでした」と　あなに　ふかです。

○ところが　その　かこは　ちがでした。

○三十ぐらんほど　まくに　でかけたのだそうです。

○きまるとそんは　がつかりしました。

○あだへしたのは　だつれた　かこが　ちがでちこ　がつかりします。

○でんせうや　まくに　しるきて　あかは　ふかつた　あるひましたが　しかだが　ありません。

○しかし　うちの　かこは　三四十ぐらんや　かくつて　へつかも　しれないうと　うかました。

○きまるとそんは　ちこし　まだうと　あるひました。

○そうして　ことかへへの　まるました。

○しかし　かくつて　ちのや　うちく　かくつて　ふへ　ここに　しました。

○そのうちや　うへのが　てんきだのか　わかりません。

○きまるとそんは　ちのや　うへ　ここに　しました。

○あれて　えれに　きました。

○その　かこの　ここは　すで　あかりました。

○えきから　あるいて　このへうの　ここでした。

○ぐへは　ありませんでした。

○きまるとそんは　ぐへや　うきました。

○えき　あるいて　うへ　ここに　しました。

○その　かこは　うちに　きました。

○このへうは　まくに　でかけました。

○きまるとそんは　がつかりしました。

○それや　まくに　ちの　すれは　ちがうたと　あるひました。

○その　うちの　かこは　たへと　うかました。

○ちのや　うへのが　てんきだのか　わかりませんでした。

○きまるとそんは　ちのや　うへ　ここに　しました。

○あれて　えれに　きました。

○その　かこの　ここは　すで　あかりました。

○えきから　あるいて　このへうの　ここでした。

○ぐへは　ありませんでした。

○きまるとそんは　ぐへや　うきました。

○えき　あるいて　うへ　ここに　しました。

○その　かこは　うちに　きました。

○このへうは　まくに　でかけました。

○きまるとそんは　がつかりしました。

○それや　まくに　ちの　すれは　ちがうたと　あるひました。

○その　うちの　かこは　たへと　うかました。

○その　うちの　かこは　すで　あかりました。

○えきから　あるいて　このへうの　ここでした。

○ぐへは　ありませんでした。

○きまるとそんは　ぐへや　うきました。

○えき　あるいて　うへ　ここに　しました。

○その　かこは　うちに　きました。

○このへうは　まくに　でかけました。

○きまるとそんは　がつかりしました。

○それや　まくに　ちの　すれは　ちがうたと　あるひました。

○その　うちの　かこは　たへと　うかました。

○その　うちの　かこは　すで　あかりました。

○えきから　あるいて　このへうの　ここでした。

○ぐへは　ありませんでした。

○きまるとそんは　ぐへや　うきました。

○えき　あるいて　うへ　ここに　しました。

○その　かこは　うちに　きました。

○このへうは　まくに　でかけました。

○きまるとそんは　がつかりしました。

○それや　まくに　ちの　すれは　ちがうたと　あるひました。

○その　うちの　かこは　たへと　うかました。

○それで　やまもとさんは　どう　しようと　おもひましたか。
○やまもとさんは　どのくらゐ　まちましたか。
○その　ひとは　三四十ぷんで　かへって　きましたか。
○そこで　やまもとさんは　どう　しようと　おもひましたか。
○うちを　でようと　した　とき　だれが　かへって　きましたか。
○そこで　やまもとさんは　どう　しましたか。

三　十

一　教　材

新出語　おでかけ　こいしかは　まゐり　おもって　をり　でも　ちよつと　ございまして　かねこ　あがらなければ　さやう　よろしく　かしこまり　まうしあげ　さあ　おいとまいたし　おじやま　よろしい　あそんで　いらっしやって　ください

語法　どこかへ　おでかけですか。　おともだちでも　おたづねですか。

發音　キョオワ　ドコカエ　オデカケデスカ＝　ゴゼンチュウワ　ドコエモ　デカケマセン＝　ガ｜ゴゴニ　コイシカワマデ　マイリタイ＝　ト　オモッテ　オリマス＝　オトモダチデモ　オタズネデスカ＝　チョット　ヨオジガ　ゴザイマシテ｜　カネコサンノ　トコロエ　アガラナケレバ　ナリマセン＝　サヨオデ　ゴザイマスカ＝　ワタクシワ　カネコサンニワ　シバラク　オメニ　カカリ＝　マセンガ｜ヨロシク　オッシヤッテ　クダサイマセンカ＝　カシコマリマシタ＝モオシアゲマス＝　サア｜ソレデワ　オイトマイタシマショオ＝　オジャマイタシマシタ＝　マア｜ヨロシイデワ　ゴザイマセンカ＝モ＝　オ　スコシ　アソンデ　イラッシャッテ　クダサイ＝　アリガトオ　ゴザイマスガ｜キョオワ　オ＝　イトマ　イタシマショオ＝　サヨオデ　ゴザイマスカ＝デワ｜マタ　オ＝　イデ　クダサイ＝

二　指　導

指導の問題

敬語の用法である。斯樣な教材はそのまま問答に適しないので、その中に含まれた語彙・語法の活用を主とした活潑な言語活動をさせなければならない。然るにややもすれば單なる朗讀又は對話練習の如きものになり易いから、十分注意する必要がある。

指導の方法

○やまもとさんは　きのふの　あさ　たむらさんを　たづねました。
○ちゃうど　たむらさんは　うちに　ねました。
○やまもとさんは　たむらさんが　いそがしいと　おもひました。
○それで　たむらさんに　ききました。
○「けふは、どこかへ　おでかけですか」と　いひました。
○たむらさんは　どぜんちゅうは　どこへも　でかけませんと　いひました。
○しかし　どこに　こいしかはまで　まゐりたいと　おもって　ゐると　いひました。
○「まゐりたい」は「いきたい」と　おなじ　いみで

す。

○やまもとさんは　たむらさんが　おともだちでも　たづねるのだと　おもひました。

○「おともだちでも」は「おともだちか　そのやうな　ひと」と　おなじ　いみです。

○しかし　さうでは　ありませんでした。たむらさんは　ちょっと　ようじが　あって　かねこさんの　ところへ　あがらなければ　なりませんのでした。

○「あがる」は「いく」と　おなじ　いみです。

○やまもとさんも　かねこさんを　しって　ゐました。

○しかし　やまもとさんは　かねこさんには　しばらく　あひませんでした。

○「あひませんでした」は「おめに　かかりませんでした」とも　いひます。

○「おめに　かかる」の　はうが　ていねいです。

○それですから　たむらさんに、よろしく　おっしゃって　くださいませんかと　たのみました。

○にっぽんじんは　ほかの　ひとが　じぶんの　ともだちに　あふ　ことを　しると「よろしく　おっしゃって　くださいませんか」と　いひます。

○たむらさんは「かしこまりました。まうしあげます」と　いひました。

○「かしこまりました」は「よろしう　ございます」と　おなじ　いみです。

○「まうしあげます」は「はなします」と　おなじ　いみです。

○やまもとさんは　かへる　まへに「さあ、それでは　おいとま　いたしませう。おじゃまいたしました」と　いひました。

○「おいとまいたしませう」は「かへりませう」と　おなじ　いみです。

○「おじゃまいたしました」は　ほかの　ひとを　たづねた　ときに　つかふ　ことばです。

○たむらさんは　やまもとさんに　もう　すこし　ゐる　やうに　いひました。

○「まあ　よろしいでは　ございませんか」と　いひました。これは「まあ　いいでは　ありませんか」と　おなじ　いみです。

○それから「もう　すこし　あそんで　いらっしゃって　ください」と　いひました。

○これは「もう　すこし　ゐて　ください」と　おなじ　いみです。

○しかし　やまもとさんは　すぐに　かへらうと　しました。

○そして「ありがたう　ございますが、けふは　おいとまいたしませう」と　いひました。

○たむらさんは「さやうで　ございますか。では　また　おいでください」と　いひました。

○それは「さうですか。それでは　また　きて　ください」と　おなじ　いみです。

其の他

○□さん、あなたは　けふ　どこかへ　おでかけでしたか。

○ごぜんちゅうも　おでかけでしたか。

○きのふの　ごご　どこかへ　おでかけでしたか。

○わたくしは　けさ　はやく　がくかうへ　まゐりました。

○「まゐりました」は「きました」より　ていねいです。

○あなたは　あしたも　がくかうへ　きたいと　おもって　ゐますか。

○あなたは　にちえうびには　たびたび　おでかけですか。

○えいぐわでも　みに　いらっしゃいますか。

○「えいぐわでも」は「えいぐわか　なにか」「えいぐわか　そのやうな　もの」と　いふ　いみです。

○ですから「おともだちでも」は「おともだちか　そ

のやうな　ひと」です。

○あなたは　ときどき　○○せんせいの　ところへ　あがりますか。

○あなたは　○○せんせいに　たびたび　おめに　かかりますか。

○ほかの　ひとを　たづねて　かへる　ときには　なんと　いひますか。

○もう　すこし　ねて　ください　と　いふ　いみを　なんと　いひますか。

○また　きて　ください　と　いふのを　ていねいに　いふと　なんと　いひますか。

昭和十九年十二月二十五日　印刷
昭和十九年十二月三十日　發行

南方諸地域用成人用速成
日本語教本學習指導書　上巻

編纂者　文部省

發行者　東京都神田區三崎町一丁目二番地
財團法人　日本語教育振興會
代表者　長沼直兄

印刷者　東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
（東京一）大日本印刷株式會社
代表者　佐久間長吉郎

發行所　東京都神田區三崎町一丁目二番地
財團法人　日本語教育振興會
神田（25）六二八番

不許複製